
涼宮ハルヒの活動

stringHz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒの活動

【Nコード】

N9537I

【作者名】

stringHz

【あらすじ】

高校2年になって、俺達SOS団はなんと新入部員を迎えてしまった。部員数が増え、さらに騒がしくなった団であるが、その新入部員もまた3年前の出来事を語り出す。一体この世界はどうなってしまうのだろうか。

そしてまた俺はいろいろとんでもない光景を目にしたり、ハルヒに振り回されたり。俺はなんでこんな目にあわなければいけないのだ！

涼宮ハルヒシリーズ 時系列順

このページには、涼宮ハルヒシリーズ（原作小説）と活動（オリジナル小説）を時系列順にしてあります。

学年はハルヒの学年です。

中学1年

* 7月*

- ・ 笹の葉ラプソディ（時間遡航時）
- ・ 涼宮ハルヒの消失（時間遡航時）

中学3年

* 3月* 編集長 一直線！（キヨンの小説）

高校1年

* 4、5月* 涼宮ハルヒの憂鬱

* 6月*

- ・ 涼宮ハルヒの退屈
- ・ レニーシーズンデイ（EP5）

* 7月*

- ・ 笹の葉ラプソディ
- ・ ミステリックサイン
- ・ 孤島症候群

* 8月* エンドレスエイト

* 10月* 涼宮ハルヒの活動（1）

* 11月*

- ・ 涼宮ハルヒの溜息
- ・ 朝比奈ミクルの冒険 Episode 00
- ・ ライブアライブ

- ・ 射手座の日
- * 12月*
- ・ 涼宮ハルヒの消失
- ・ ヒトメボレLOVER
- ・ 雪山症候群
- ・ 猫はどこに行った？
- * 1月* 朝比奈みくるの憂鬱
- * 2月* 涼宮ハルヒの陰謀
- * 3月*
- ・ 編集長 一直線！
- ・ ワンダリング・シャドウ

高校2年

- * 4月*
- ・ 涼宮ハルヒの分裂（2）
- ・ 涼宮ハルヒの活動（ÉP1）
- * 5月*
- ・ エンドレスゴールド（ÉP2）
- ・ 感染型五月病（ÉP3）
- * 6月*
- ・ 涼宮ハルヒの想像（3 ÉP4）
- ・ 涼宮ハルヒの孤独（ÉP6）
- * 7月* 深海症候群（ÉP？）
- * 8月* 涼宮ハルヒの創作（3 ÉP？）
- * 11月*
- ・ 涼宮ハルヒの悲観（3 ÉP？）
- ・ ライブフェスティバル（ÉP？）
- ・ 朝比奈みくるの冒険 Episode 01（ÉP？）

この小説のオリジナル作品です。

- 1 過去におきた出来事について述べており、実際の時系列は高
- 2の4月。サブタイトルは『秋山症候群』
- 2 新キャラクターもしくは新展開があるため、このエピソードとオリジナルが矛盾する可能性大。
- 3 この話は全てが繋がる予定。

涼宮ハルヒの活動 プロローグ

涼宮ハルヒ率いるSOS団が発足してもう何ヶ月たったのか、感覚的に分からなくなってきたこの頃である。

朝比奈さんと共にTPDDだかそんなような機械を使い、三年前へといき、そのうえ朝比奈さんがTPDDを紛失したとかなんだかで長門に頼んで3年間も時間を止められていたせいか、俺はちよつと時間の感覚がおかしくなっているのかもしれない。

俺がいままでに述べてきたことと言えば、野球大会に参加して長門のインチキマジックで優勝候補に勝ってしまった出来事をはじめ、先程述べたように、三年前にいったこと、そして、夏休み初日から孤島へ行き、古泉の計画したドツキリの殺人事件を解決して、夏休み後半ものんびりしていられず、ハルヒに散々振り回され、8月後半をエンドレスにくり返し、15498回目の俺達が、8月後半のループを抜け出すことに成功するという出来事があり、そして、ハルヒが軽音部のライブに急遽に参加し、コンピ研がパソコンを返してもらったために、ゲームで勝負、そのときに長門によってコンピ研がインチキであることが判明。プログラムの書き換えによって公平にし、そして勝つはずのないゲームに勝利してしまうという出来事もあった。12月にはハルヒどころかSOS団、古泉、本来の朝比奈さんと、本来の長門がいなくなり、朝倉が戻ってきて、その現象が今でも夢か現実かわからなかったりと、まああげれば原稿用紙100枚なんて簡単にいけそうなほどSOS団は周りから呆れられる活動を一生懸命やってきたのだ。

ここまで俺がSOS団を投げ出さず活動をしてきたことを本当に誉めてほしい。これが普通の人間ならば、入団させられた数日後には他の学校へ転校してしまっているだろう。現に、朝比奈さんだっていつ何処へ言ってもおかしくない立場にいる。

もちろん、今まで述べてきたことは、ほんの一部にしか過ぎない。

なんなら毎日活動日誌を書いてやってもいい。ハルヒの言動、団員の様子など。見たら100人中100人が呆れる内容だ。

「未来人、宇宙人、超能力者を見つけて一緒に遊ぶ」なんて部活や同好会を見たことがあるだろうか？ないだろう。呆れて当然である。未来人、宇宙人、超能力者がいるなんて、ほとんどの人間は、面白半分でそう思っているにすぎない。だが、ハルヒはそれを真剣にとらえている。面白半分ではなく、そして「いてほしい」と思っている訳ではなく、「いる」と思っているといっても過言ではないのだ。古泉がいうには、それが未来人、宇宙人、超能力者を呼び寄せた原因なのと言う。ふと俺は思った。未来人、情報統合思念体、機関とかはもしかして涼宮ハルヒが想像したものなのではないかとな。だが、その考えは理由をきかれたとしても答えられるものでもない。ので放っておくでしょう。そろそろ本題に入る。

今回は今までに述べられることの無かった出来事をまたいくつか紹介したい。前にもいちど言ったと思うが、誰か1人でも俺の抱えることになった名状しがたい気分を共有してもらえたら本望である。さて、とりあえず何から話そうか。・・・そうだ、1つ長いようで短い物語があったことを忘れていた。まずはそれから話すことにしよう。

涼宮ハルヒの活動 プロローグ（後書き）

とりあえずプロローグは書いてみましたが、第1章以降を書き終わるのはかなり気が遠いような気がします。ハルヒシリーズは設定が少し複雑な気もしますので、設定上の間違えがないか推敲もする必要がありますし。

第1章、現在書いていますが、まだ6000文字です。

なお、この小説のタイトルは『涼宮ハルヒの活動』ですが、「活動」だけで小説完結にはせず、以降も普通に短編やら長編やらをどんどん書いていこうと思いますので宜しく願います。

ちなみに「活動」ですが、本1冊分くらいかけるといいなっと思ってたりします。達成できるかは分かりませんが；

第1章（前書き）

現在、推敲が完璧に終わっていません。矛盾点があっても、現時点ではスルーをお願いします。

第1章

「世界を大いに盛り上げる為の涼宮ハルヒの団」略してSOS団は、結成して既におよそ1年が経っていた。カレンダーを見たら4月だったのだ（ちなみに結成は昨年5月）。もう新年度である。月日が経つのは早いものであるなあ。

中学生の頃は、普通の生活をしていたためか、何となく1日が長く感じられたような気がした。だが、今年になり、ハルヒに無理矢理SOS団に入団させられてから、1日がそれより短く感じられるような気がした。

もっと細かく言えば、授業が長く感じられ、部活動・・・とはいえないのだが、SOS団絶賛活動中（別に絶賛なんて言葉は必要ないか）の時には、短く感じられる。特に朝比奈さんを眺めていると、1分ほどしかたっていないと思っていたがハルヒに5分以上じっと見てると注意されて時計をみると本当に5分以上経っていたりして。家に帰れば妹とシャミセンと遊ぶ羽目になり、そのときもまたとても長く感じられるという・・・。

俺はついにSOS団に溶け込んでしまったのかも知れない。

さて、この話はまず最初に、昨年の10月の話にさかのぼる。

「次の3連休に、また合宿に行くわよ！」

いつものように思いつきなのかどうかはわからないが、今回は事前に計画してあったのか、修学旅行でいうしおりなるホチキスでとめられた数枚の紙が団員に配られた。

見れば、タイムテーブルまでしっかりとしており、前回の夏休み初日からの合宿と違って旅行会社でもついてくるのかと思うほどしっかりしている。これはハルヒが作ったのか？

「いいえ、それを作ったのは僕と『機関』の仲間ですよ」

『機関』の仲間ってあれか？新川さんと森さんと、多丸兄弟か？

「ええ、そうです。今回も退屈してしまわないように、しっかりと計画が練られているはずですよ」

と、まあそのしおりの完成度に俺は何も言うことがないのだが、俺はその日には予定が入っていたのだ。

「なあ、ハルヒ。俺の両親が地域の体育祭に出るから、俺と妹2人で家に留守番なんだ。どうやらその日は俺は無理みたいだ。残念。

みんな俺の分まで楽しんできてくれ。おみやげは別にいい。」

と、本当のことを伝えた上で、今回はハルヒに振り回されずに済みそうだな。なんてたって妹置き去りにして出掛けていたら妹が強盗に襲われたりとか、誘拐犯に連れさらわれたりしたとか、危険がある。そう考えたら合宿優先！なんて言える訳無いだろ。

「キヨン、そんなんでもSOS団の活動を欠席できると思ってるわけ？」

言うと思った。それか何だ？妹が襲われたら責任でもとってくれるのか？

「バカじゃないの。あんた頭悪いの？妹さんも連れてくればいいじゃない」

そうか、その手があったか……。じゃなく、ハルヒのことだからこういうことを言うのは基本なはずなのに、今回はすっかり忘れていたせいで、もうこれ以上反論できなかった。

ちなみに、合宿は2泊3日。土、日、月とフルで、休みなし。給料がもらえるのだとしたら、年中無休なのだから、週休2日制の会社にくらべて給料が多いだろうな。そして、場所やタイムテーブルは以下のとおりだ。

日時 今週の土、日、月（体育の日）の3連休 2泊3日 雨天決行

場所 紅葉がきれいな山

土曜日

9：00 駅前集合（遅刻したら罰金）

12:00 到着予定、昼食
 13:00 遊ぶ
 18:30 夕食、以降各自自由
 日曜日
 6:00 起床、朝食
 7:00 遊ぶ
 12:00 昼食
 13:00 事件発生
 18:30 夕食、以降各自自由
 月曜日
 6:00 起床、朝食
 7:00 遊ぶ
 12:00 昼食、以降遊ぶ
 15:00 下山
 18:30 夕食（土曜日に遅刻した奴のおごり）
 20:00 解散予定

実に大まかに書いてみた。本当はもうすこし細かく書いてあったりするのだが、どうせ遊ぶだけなので、遊ぶと記載したままで。
 場所：紅葉の綺麗な山・・・ってまだ決めてないのか？あと2日後だが。

「持ち物は最後のページに記載されてるわ！全員準備をしっかりと
 ておきなさい！」

この間、朝比奈さんと長門はずっと無言だった。

「朝比奈さん、どうかしました？」

実に真剣な表情でしおりの文字を目に焼き付けていたのかどうかはわからないがそのような行動をしていた朝比奈さんは顔をようやくあげた。

「あの・・・2日目の事件って何なんですか？」

声が震えていた。大丈夫ですよ朝比奈さん、何があっても俺が何と

かします！

「よし、決まりね！じゃあ今日はこれで解散！」

誰もお前の意見に賛同すらしていないのだが、もう団員の少人数の意見も尊重せずに決定してしまっている。民主主義はどこいった。民主主義は。

ハルヒはどうやらご機嫌のようであり、足取り軽く文芸部部室から去った。俺は体が重いぜ。

俺は部室を去る前に、とりあえずでいいから行っておこうと思った
「長門」

ハルヒの話が終わった為か、しおりからハードカバーの本に目を移していた長門が顔を上げた。

「いつも悪いが、なんかあったらまた頼むな。」

長門は首を顕微鏡で見なければよく見えない程小さく首を縦に振り、そして読書に戻った。

古泉は、帰宅の準備を終え、帰ろうとしていた。

「今回、言い出したのはお前の方からか？」

古泉はその顔を俺にするなといったくなる程、少し微笑んで

「いいえ、涼宮さんですよ。また合宿して、事件解決したいわねと言っていましたから。大丈夫です。今回はドッキリではなく、事件を解決するゲームの様な感じで事を進めていくので。これだったら涼宮さんも退屈することはないでしょう。」

そうかい。俺には何だか知らないが不吉な予感がするぜ。

妹に合宿があるんだが、お前もついてきてもいいそうだな。いくつか？と聞いたところ、0.1秒後に返答が帰ってきた。それはそうだな。今回は密入国をしようとしていたのだからな。

俺は、中学時代に修学旅行で使ったバッグを収納スペースの奥から取り出し、そして着替えの服や暇つぶしにできそうなものをさしあたりバッグに詰めておいておいた。

妹は荷物の準備を一切していなかった！3日間同じ服を着るつもり

だったのかこいつは。

そして3連休の日がやってきた。罰金を免れる為に集合時間の30分前に到着するようにしようと思ったのだが、妹と一緒にいるためであるだろうか、いつもより時間がかかってしまったのだった。

「遅い。罰金。」

さてさて、旅行費は無料だし、30分前についていれば罰金なんて無いだろうしなんて余裕をもっていた俺の財布の中身にある所持金は無駄遣いをしないために少ししか持って来ていないのだ。あとは全て家に置いて来たのだ。罰金を支払った俺(全員の弁当代)は、もう財布の中はほぼ無いに等しい状況だ。公衆電話で10分以上話すための所持金はなんとかあるようだから、迷子になっても安心だ。・・・というより山に公衆電話なんてあるのか？

「何ぶつぶつ言ってるの？」

どうやら俺の独り言はハルヒが聞き取ったらしい。まあ当然お金の無い俺に同情する訳でもなく、ましてやお金を貸してくれるわけでもないのは言うまでもない。

「よし！SOS団合宿、出発っ！」

と、ハルヒが叫ぶと

「わあい」

俺の妹が飛び跳ね、

「現場は紅葉が見ごろらしいですよ。昨日の情報ですが。」

と、古泉は状況を伝え、

「紅葉きれいだといいですね」

と、朝比奈さんは言い、

「・・・・・・・・」

いつものように長門は無言でピクリともせず、それぞれの反応を見せていた。

駅構内には、執事でない執事(どう見ても一般人には執事であるように見えるが違うのだ)の新川さんと、年齢不詳の本当にメイドさ

んなのかわからない（一般人にはメイドに見えるが『機関』に関わっているらしい）森さんが出迎えてくれた。さすがに電車を貸切で・
・なんて夢のようなことはなかったが、電車で移動した後はマイ
クロバスの貸切を手配してくれたらしい。

およそ30人も入るバスを貸しきって、実質、新川さんと森さん、
妹を含め8人しか乗らないのであるからそれはもうとても豪華であ
ることは間違えない。1人3席使っても大丈夫なのだからな。

「さて、到着まではしばしお時間を頂きますがご了承下さい。」

と、荒川さんはご丁寧に言った。

「いいえ、大丈夫です。今回もよろしくお願いします。」

こいつの学校外での愛想のよさに少し感心しつつ、俺も2人に対し
て軽くお辞儀をした。

「では、こちらへ」

今度は森さんが案内をしてくれた。

ハルヒが森さんと荒川さんの後ろにつき、その後を長門が普段通り
の無表情でつき、そして俺と古泉が横に並び（近寄るな）、その後
を朝比奈さんと妹が手をつないでついてきていた。

ああ、そうそう。先に行っておくと、俺が一番語りたかったのはこ
の合宿のことではない。本当に話したいことがおきるきっかけとい
うか何と言うか。もう、結果から言ってしまうおう。

そう、実を言うと高校2年生に進学した俺達SOS団のもとに、な
んと2名の新入団員が現れたのだ。こんな馬鹿らしい同好会でもな
いだだの団に入団してくるなんていないとおもったが、・・・いた。
実はそれもハルヒ関連だったりしてな。それは後でゆっくりと語ら
してもらおう。

電車に乗り込んだ俺達は、およそ2時間の電車での旅をすごした。
女性陣はトランプを楽しみ、俺と古泉はその後ろでオセロをしてい
た。

「涼宮さんは、今回はこの世をゆるがしたりすることは無いと思われますよ。実際、前回の夏の合宿も、本当の事件は起こらなかったわけですし」

「だといいがな。だがハルヒのことだ、いつ突然何を言い出すか分からないんだから安心できん」

俺はそういつて、自分の黒の石を置いて、たくさんの石を裏返してやった。

「今回は探偵ゲームであることを事前に伝えてありますし、今回は一般人の方々も参加してもらってより臨場感のあるものにしたいと思っています」

「まあ、ハルヒが退屈して本当の殺人事件が起きないように祈るばかりだな」

「あたしが1番！」

ババ抜きに勝利したハルヒが周りを気にせず高らかに叫んでいた。

目的の駅に到着した俺達は、貸切のバスに乗り込んだ。

ゲームをするために、全員が後部座席（新川さんと森さんは前に座った）に座って、UNOをすることとなった。

カードゲームをするのなら、大富豪とか、そういうもう少し深い遊びがいいと思っただが、妹がいる上に、宇宙人こと長門も知っていないだろうし、となるとルール説明が面倒だし、ということでUNOに賛同しておく。

それで、「妹さん以外でビリの人はおごりね！」とかハルヒが言い出すときに限って、手持ちは青色一色だったりするのだ。どうせ今回も俺のおごりだろう。毎月いくらかおこずかいをもらっても足りんそれで、ハルヒがスキップとかリバーとかを使いこなし俺に順番が全然回ってこないのだ。結局1番がハルヒ、2番が俺の妹、3番が朝比奈さん、4番が長門、そして俺と古泉の対決となった。

俺の手持ちは青が3枚、黄が2枚、赤が1枚と、一方古泉は8枚と、現時点では枚数では俺の方が勝っているのだ、しかし、長門が出し

たカードの色は緑。つまり、俺は山札から引かなければならない。3枚引いて、ようやく緑色のカードが登場した。古泉も緑がなかったらしく、また3枚引いて、黒色の+4とかかれたカードを差し出した。

俺はしぶしぶカードを4枚引いた。そして、カードを両者ひくことなく次々と出してゆく。そして両者残り2枚。俺が1枚を出すと、古泉は同じ数字を出して色を変えやがったのだ！

俺は結局その後8枚も引く羽目になり、俺の惨敗に終わった。古泉には普段勝っているのに、こういうときに限って負ける。前だってそうだ。ノーレートの時に限って、ポーカーでロイヤルストレートフラッシュなんて出たんだからな。1枚も交換せずに。

それで、俺は全員のジューズ代を支払うことになった。計算すると120×6で720円だ。だがしかし、俺の所持金は弁当代ですっからかんである。

ハルヒが利息10%で貸すという。銀行よりもはるかに高い利子を付けてきやがった。792円の出費ということになる。

そうして、俺達は時間通り、山へ到着した。山道はすっかり整備されていたようで、バスで通ることができ、到着したのは宿泊場所の目の前であった。

宿泊場所・・・別荘のインターホンを古泉がならすと、多丸圭一さんが出迎えをしてくれた。俺達は他の宿泊客もいるという、既にしている説明を受け、そして部屋割りを決めた。妹は朝比奈さんと同じ部屋である。

「いいか、朝比奈さんに迷惑かけたら妹とはいえ容赦しないからな」「はい」

俺は言い残して、朝比奈さん&俺の妹部屋を後にしてそうして自分の部屋に荷物を置いて、そしてハルヒの部屋へと集合した。

「さて、山に来たことだし、何をしようかしら」
それはお前が計画しておけ。

「私に権限があるのはもちろん当然のことだけど、なんか面白い遊びを今考えてるとこなのよ」

全ての権限は団長にしかないのだろうか。権力の行き過ぎを防ぐ為に三権分立があるというのに、SOS団は昔の独裁政治なのではないだろうか。

「何かいった？」

「いや、何も」

またハルヒは腕を組んでしばらく考え込み、そうだ！というところから宣言した。

「キノコ狩りをしましょう！」

キノコ狩り。この宇宙人、未来人、異世界人、超能力者と遊びたいと願っているこの涼宮ハルヒにしては、何か普通の意見で、雨が降るんじゃないかと思っただが、どうやら雨は降らなさそうだ。やはりいつも通り俺がターゲットになった。凶鑑も見ずに拾った茸を「食べてみて」と差し出されるのだ。俺はまだ死にたくないぞ。

「これは食べられるのか？」

「大丈夫」

宇宙人なのに地球の食べ物について分かるのだろうか。情報思念体があるからか？と長門の返事に少しの心配を抱きつつ、一口かじって見た。どうやら本当に大丈夫のようだ。

「なんで知っているんだ？」

「あなたが死んで涼宮ハルヒが動いてもらっては困る。」

話がかみあってない気がしたが、なるほど、と俺は納得してしまう。それに、俺だって一応人間だ。毒キノコ食って人生終了、なんて考えたくもない。

ハルヒは、たったの5分でキノコ狩りが飽きたらしく、紅葉の葉をとっては朝比奈さんの頭にのせてみたりしていた。朝比奈さん、似合ってます！

ハルヒがそっちに集中していた為に、俺は先程から影の薄い古泉に

問いかける。

「ちなみに、一般の来客はこれから起こる事件が演技であることを知っているのか？」

「ええ、もちろん。隠しておいて混乱さしてしまっても、こちら側としても困りますし。それと、今回の被害者はあなたですよ」

「なんか軽々しくいつているが、それは本当なのか？」

「もちろん。では、あなたには一度死んでもらいましょう」

古泉はポケットからナイフを取り出した。Why? 何故? まあいい、長門ならこの状況をどうにかしてくれるだろう。・・・しかし長門は動かない。こっちに気付いてるはずなのに、それに俺が死んだらハルヒは動くつていま言つてただろ・・・なるほど。そういうことか。しかしもう遅い。避けることはできない。俺の人生も20年たたずに終わるか。今考えればいろいろと後悔したな。俺の腹にナイフが突き刺さった。

「・・・あなたも演技力があるんじゃないですか？」

「30%くらい本気だと思ったからな」

長門が動じないことで気付いたんだがな。

ちなみに朝比奈さんは単純で、顔が少し青ざめていた。ハルヒはそのナイフが偽物であることに気付いたのだろう、全く動じていなかった。

それで、本当はどうなんだ？

「被害者は、新川さん、森さん、多丸兄弟、SOS団の誰でもなく、一般客の方々です」

なるほどな。と俺は理解した。被害者を前回と一緒にしてしまえば、面白味に欠けるし、圭一氏が被害者であるならば、犯人はほど特定できてしまう。

一般客ならば、そこにいた95%以上の人は、その人と関係がないといっても過言ではないからな、犯人は特定しにくい。

「楽しみは明日までとっておくとしましょう」

その日は、俺にとっては久々の平和な日であった。紅葉を髪飾りにした朝比奈さんはもう言葉では表しきれない程よかったし、ハルヒはとんでもないことをキノコを毒味させようとしたことを除いて言い出さなかったし、長門もおとなしかったし、古泉は、まあ、いいとして。こういう日こそ、1日が早く感じられるものである。気付いた頃にはもう既に入浴を終え、そろそろ就寝、という時間帯になっていた。

明日の『機関』主催の推理ゲームに一応期待しつつ、俺は明日ハルヒにいろいろ振り回されることを仮定してベッドに入ったのだった。

俺はまだ1時間くらいしか寝ていないと思っていたはずなのに、もう窓の外には今日も地球を照らそうとやる気の満ちている真っ赤な太陽が顔をだしていた。

折角の休みなんだし、普段ならいつも朝はぐっすり眠っているのだが、この宿泊施設はバイキングであるため、時間が決まっているのだ。だから寝たくても起きなければ朝食にありつけない。そのうえ、朝食をあきらめたって、ハルヒが俺をベッドから落としてまで起こそうとするだろうし、痛い起床を味わうのだったらさっさと自分でおきて朝食を食べた方がよっぽどましだ。だから俺はゆっくりベッドからおりて、バッグから自分の服をとりだして着替えると部屋をでて、とりあえず向かいの古泉の部屋のドアをノックした。

「はい」

中から声が聞こえてきた。どうやら古泉は既に起きているらしい。

「入っていいか？」

「すいません、今推理ゲームの小道具の準備中なので、入室は控えていただけませんか？」

小道具は普通、当日に製作するものじゃないだろ。

朝早くから朝比奈さんや長門の部屋をノックしてまで叩き起こすのは可愛そうだから、と思って俺が部屋へと戻ろうとすると、既に髪を整えたハルヒが部屋を飛び出して叫びやがった。

「みんな、起きなさいっ！」

おいおい、他にもお客さんがいるんだぞ、ちよつとは静かにしろよ。長門はハルヒが叫んでから数十秒しないうちに部屋からでてきた。長門が私服姿であることは滅多に無いのだから、写真に納めておきたいとも思ふのだが、またカメラを忘れてしまった。だがいい。あとで朝比奈さんが撮影した写真を見ておくことにしようではないか。朝比奈さんは10分後に部屋の扉を開けた。ちなみにその10分間は何をしていたかという、俺は部屋でテレビをつけて朝のニュースを無心で見ていたのだった。

午前中は自由時間である。ハルヒが持ってきたぺちゃんこのビニール製のボールを膨らまして、山の平らな草原で、ドッジボールやラレーボールやらで球技を行った。ドッジボールは生き残りをかけて対戦し、結局優勝はハルヒになった。ラレーボールでは、人数が5人と中途半端だったので、トーナメントなどは行わず、ローテーション方式で対戦した。そんな午前中はすぐに終わってしまい、そしていよいよ事件の始まりである。

「た、大変だああ！誰かが殺されてるぞお！」

1人の男がそう叫んで廊下を走り、そして全部屋の前の廊下で叫び終わると、殺害現場の場所へ案内してくれた。

殺害場所は3階のある部屋。ここで殺害されているという。

「この人の名前は分かりますか？それとご親戚やご家族の方は？」

ハルヒが探偵気取りで前へでてさういうと、オーナー役である圭一氏がこういった。

「名前は宿泊リストによると、綿雨^{わたあめあさり}麻理さんですね。今回は一人で宿泊のようです。」

その被害者役の綿雨さんとやらは、机の横にうつ伏せで倒れている。見た感じは15歳くらいで、美少女であった。体には目立った外傷は無かった。しかし、机の上には倒れたコップがあり、そこから飲みかけの麦茶がこぼれていた。

「どうやら、死因は麦茶に入っていた毒が原因と考えられるわ」

ハルヒがそういう。その推理はどうも正しそうで、目立った外傷がないだけでなく、抵抗のあともない。周りには麦茶しかないの、これは毒物としか考えられないのである。

「宿泊リストに記載されている方は、全員この場にいるようですね」と圭一さんは言った。

今ここにいるのは、俺、ハルヒ、朝比奈さん、長門、古泉、新川さん、森さん、圭一さん、裕さんと、前回のメンバーに加え、殺害された綿雨さん、第一発見者の篠さん、そして一般客に白木さん、時波さん、陣さんがいた。人数が多いので、特定はかなり難しい。

「まだ体温があります。長門さん、計測をお願いしますか？」

長門はゆっくりと前へでて、綿雨さんを手で数秒さわって、告げた。「36度4分」

普通ならば触っただけで体温がわかるなんてのは、全員を驚愕させてもおかしくないと思われることだが、全員この事件が嘘であると知っていて、これも演技であると思っているようで、動じていない。

「つまり、死亡推定時刻は1時間前から今と推定されますね」

と、いうことは誰かが最近この部屋に進入したということになる。

「警察には連絡を入れておきましたが、どうやらこの天気じゃここへ向かえないということです」

設定上、今はどしゃぶりということになっている。つまり警察がここへ向かうことが出来ないという設定でもあるのだ。

ルールは、制限時間2時間。2時間後に第2の被害者がでた時点でゲームオーバーという風になっている。難易度はそう高く設定していないそうで、1時間半もあれば普通ならば解決できてしまうという。

「まずは荷物チェックからした方がいいのかしらね」

ハルヒはそういうと、全員の荷物を確認し始めた。SOS団でハルヒと一緒にいた者は、全員荷物検査をパス、証拠となるものはなか

った。また、SOS団は全員でまとまっていたために、アリバイが証明された。圭一さんと裕さんも証拠となるものは見つからず、圭一さんは部屋にこもってずっと仕事をしていたことを新川さんが目撃していたというのでアリバイが証明された。これで残りは新川さん、森さん、裕さん、篠さん、白木さん、時波さん、陣さんである。そのうち、新川さん、森さん、裕さん、篠さんまで確認して、全員から犯人と思われるような物はみつかっていない。そして、白木さんのチェックに入った。

「白木さんも特に怪しいものは入っていないよう・・・あつ！」
ハルヒが何かに気付いた声を発すると、俺達はハルヒに近づいた。そしてハルヒが白木さんの鞆から、1つの入れ物を取り出した。それには、薄い紫色の液体が入っていた。

「これは・・・」

本当に毒物かどうかなんて舐めて確かめることの出来るものではないので、偶然あつた機械にいれて調べたところ、毒物であることが判明した。本当の事件ならば偶然にも機械があつたなんてことはないだろうが。

「白木さん、貴方がやったんですか？」

俺はハルヒに強引に押し付けられて白木さんに問いかけた。

「断じて違う！俺はやってなどいない！」

白木さんは否定をするが、ハルヒが割って入ってきた。

「じゃあ、アリバイはあるのかしら？」

しかし、白木さんはそれでも否定を続けた。

「じゃあ、他に証拠はあるのか？誰かが俺の鞆に毒物を入れた可能性だってあるだろ！」

ハルヒと白木さんで言い争っていると、裕さんが駆けつけてきて、疲れたのだろっ、少し息を整えると、ゆっくりと口をあけた。

「死体が・・・」

死体が消えた。裕さんはゆっくりとそう言った。急いで部屋にいつ

てみればそこに被害者の綿雨さんの姿はなかった。犯人によってどこかへ運ばれたのだろう。圭一さんが、宿泊施設内へ放送をいれると、全員がすぐに集まってきた。

第1発見者が死体を発見してから、白木さんの荷物チェックが終了するまで、およそ30分。そこから死体が確認されてから、そこに誰かがいた時間を差し引いて15分程度らしい。全員がこの場にいることから、15分程度で別の場所に運んでしまったらしい。この間にどうやって死体を運んだのだろうか。

「とりあえず、死体を捜しましょう」

ハルヒがそういつて、全員で死体の捜索に当たることにした。俺はハルヒと、ゲームなのにビクビクしている朝比奈さんを連れて、捜索にあたっていると、時波さんと呼ばれる、綿雨さんと同じくらいの年齢であろう男子がいた。捜索をはじめて20分が経過している。

「時波さん、なにか発見はありました？」

ハルヒは丁寧に問いかけた。SOS団でいるとき（文芸部室で活動中のとき）は、これとまったく逆である。

「いいえ、特には何も。そちらは？」

問い返してきたので、ハルヒが「特にない」ということを告げると、俺は時波さんの汚れている手が目に入った。

「あの、時波さん、手、どうかしました？」

俺は区切り区切りで問いかけた。すると、時波さんは自分の手を見てこう言った。

「ああ、これですか？先程転んでしまいましたね。手が砂について、この有様です」

大丈夫かと俺が問いかけると、これくらい平気ですよ、といって捜索を続けはじめた。

「何か怪しいと思わない？」

あの、時波さんとやらか？

「転んだのはいいとして、なんか手についていたのは砂だけじゃ無

かったのよ」

じゃあ、他の人に聞いてみたらいいじゃないか。ほら、そこに新川さんがいるぞ。

「じゃあ、聞いてみましょう」

新川さんは、他の者が勝手に進入しないよう、宿泊施設の入り口で見張りをしていた。

「新川さん、先程そこで時波さんが転んでいましたか？」

すると新川さんは、答えた。

「彼なら、先程からこの辺で搜索を続けていますね、先程転んでいたの肩をかそうとしたら大丈夫だと言ってそのまま搜索を続けていましたよ」

どうやら時波さんはあまり関係ないようである。

タイムリミットまであと50分をきつた。死体はなかなか見つからなかったが、ここで動きがあった。言おう。

ハルヒが死体を発見したのだ。

場所は錆びたフェンスの中。そこへ放置されていた。

「何故こんな場所に放置したのかしらね」

ハルヒがそういつてフェンスにあった扉をあけると、フェンスの錆がハルヒの手についた。

「錆がすごいね、ここ………！」

ハルヒがピタツと動きをとめた。

「どうした？ハルヒ」

ハルヒは呟いた。

「分かったわ、犯人が。」

ハルヒは全員を死体放棄現場に集合させ、そして犯人を告げた。

「犯人はあなたね、時波さん！」

宣言した。俺も先程のハルヒの説明に納得したので、いまここに全員を集めている。

「何ですか？証拠なんてないでしょう？」

ハルヒは「証拠ならあるわよ」と言った。

「あなたの右手、汚れているでしょう」

「これは先程転んだと説明したはずですが」

「そうね。転んだなら当然手が汚れてもおかしくないわ。でも、あなたは何故砂を払わなかったの？」

時波さんは一瞬表情を変え、すぐさま否定した。

「搜索に夢中になったから、払い忘れていただけです」

「けど、隠しきれてなかったみたいね。その手についた錆、このフェンスを開けたときにつけたものでしょう。だがそれだけでは証拠とはいきれないけど、普通、フェンスをあけたら気付くはず。なぜなら、死体はフェンス扉の目の前にあったのだから。それともう1つ、今日白木さんの部屋にはいつて内線をかりたそうじゃない。自分の部屋のが壊れているというて。そう、そのとき電話の横にあった白木さんの鞆に毒物をいれて、白木さんを犯人に見立てた。」

「ちゃんとした犯人なら、埋めてしまうくらい可能ではあるが、まず綿雨さんを外へ運び出して、その後に集合、搜索が開始してから全員の目を盗んでフェンスの向こうへ置いた。長居をするとはれる可能性があるので、埋めないでそのまま別の場所、人のいる前で搜索をして、そして転んで、手を汚した。という推測だ。」

時波さんは「そう、彼女とは同級生で、成績優秀の彼女が憎らしかった」というなんともしょうもない理由で殺害してしまったと述べ、そうして事件は幕を閉じた。

3日目、俺達は下山した。生き返った綿雨さんと圭一さん、裕さん、犯人役の時波さんが見送るなか、再度新川さんと森さんに案内され、下山した。

「いやあ、事件はすっかりあたしが解決したわね」

ハルヒは満足のご様子だ。今回も不吉な予感がしたがどうやらそれ

はずれたようで、特に朝比奈さん、長門、古泉なんて何もして
なかったといっても過言ではない。

そんな平和で楽しかった思い出も、映画撮影、ライブ、ハルヒ失踪
事件などを経て、その思い出はいつしか頭の片隅にいつてしまった。

そして、その時は急にやってきたのだ。

俺は高校2年生に進級し、俺はまたもやハルヒと同じクラスという、
特に嬉しくない出来事があり、そして、去年と変わらないSOS団
の生活が早くも始業式から2週間がたとうとしていた。

「新入団員、こないかしらねえ。仮入部にも誰もこないし。」

当たり前だ、こんなところに部員がくるなんていうのは、もうそい
つは馬鹿確定だな。

そう思っていると、ドアが開いた。

「こんにちは。わたし、このSOS団に入部します！」

女子1名が部屋に入ってきたのだ。

.....

この沈黙は俺とハルヒと古泉と朝比奈さんと長門の分である。なん
ということだ。嘘だろ。

そして、その人は見覚えがあつた。

「それで、名前は？」

「わたしは、わたあめまり綿雨麻理といいます」

なるほどね。どうりで見覚えがあるわけだ。ハルヒも思い出したら
しい。

だが、たしか綿雨さんの名前は「あさり」じゃなかったか？漢字は
一緒みたいだが。

「あ、あのときの読み方は仮ですよ。みなさんお久しぶりです」

顔や声は可愛らしく、見た感じではハルヒ程ではなさそうだが、元
気そうな人だった。

それで、時雨さんとやらは、古泉みたいに見苦しくなさそうである。
そしてハルヒはいった。

「本当なら、入団試験を受けてもらうところなんだけど、去年の秋にはお世話になったし、入部を許可するわ。じゃあ、ここに入部届けをおいてくれる？」

彼女は素直にそこに入部届けを置いて、こちらへ向き直った。ここはやはり自己紹介をするべきなのだろう。

「あ、俺は・・・」

「それがキヨン」

勝手に紹介された。しかも「それ」って何だ？それに俺の名前はキヨンじゃない！

「うるさいわね、んでそのウエイトレス姿のが朝比奈みくるちゃん」

「これからよろしくお願いします」

「それで、そこで本を読んでるのが長門有希」
そこで、綿雨さんが急に口を開いた。

「あ、長門さん、随分とお久しぶりです」

長門は顔をあげ、そしてまたハードカバーの本へ目を向けた。

「長門、もしかして知り合いか？」

俺が問いかけると長門はまた顔をあげ、少しうなずきまた本へ目を向けた。

「それで、そこに座っているのが副団長の古泉くん」

「古泉です。どうぞよろしく」

「そして、私は涼宮ハルヒ。さて、これからこの団の活動内容を改めて説明するわね」

ハルヒがそう言って長々としゃべっている中、俺は彼女に忠告した。
「入部はやめた方がいいと思いますよ、こいつは特になにをしでかすかわかりませんし」

「いえ、大丈夫です」

綿雨さんは言った。何故入団する気になったのだろうか。

「キヨン！聞いているの？あんたも初心に戻る為にちゃんと聞きなさ

い！」

はいはい。

そうして、説明を終えたハルヒがここに宣言した

「新団員も入ったことだし、新SOS団、本格的に活動開始よ！」
と、まあそんなわけで、新団員が入ってきてしまったのである。や
れやれ、今年度は何がおきることやら。

第2章

「新団員も入ったことだし、新SOS団、本格的に活動開始よ!」
と、まあそんなわけで、新団員が入ってきてしまったのである。やれやれ、今年度は何がおきることやら。

「それと、麻理ちゃん、明日は入団試験をするから、ちゃんと勉強してくるようにな!」

何だ?入団試験って。落ちたら入団させない気にいるのかおまえは。

「はい、分かりました・・・でも一体何を?」

そこ、真剣に訪ねなくていいぞ。

「国社数理英の5教科と、SOS団の独自教科よ」

おい、聞いたこと無いぞ。SOS団の独自なもの、なんてのはまあ大体想像がつくんだけだな。

「じゃあ、あたしは問題をつくるから、今日はそこでゆっくりしていつて、馴染んでいくといいわ」

さて、問題回答者が問題作成者の部屋にいていいのかは疑問だが、まあいいとしよう。

「お茶、どうぞ」

朝比奈さんは、綿雨さんにお茶を出した。綿雨さんは「あ、有難うございます」と丁寧に軽く頭を下げた。こういう態度はハルヒと大違いである。

ハルヒは問題作成後にさっさと帰宅してしまい、朝比奈さんと古泉も帰宅、長門は部活動終了時刻と同じに出ていった。俺がさっさと帰らなかった理由はもちろんたつたの1つである。

「綿雨さん。あなたは宇宙人、未来人、超能力者、異世界人にあてはまるのですか?」

彼女は、特に驚いた様子もなく、そしてすこし沈黙して、言った。

「私は、もともと普通の人間ですよ。ですけど・・・」

そう言ったとたん、綿雨さんは俺の視界から消えた。何だ？

「後ろです」

俺はその声に反応し後ろを向くと、彼女はそこにいた。テレポータか！？

「正解。キョんくんの言ったものであてはまるのは超能力者に近いかな？」

ちよつと待て、まさかあなたまで・・・。

「でも、残念ながら私の超能力にはあてはまらないの」
・・・どういうことだ？

「『機関』『情報統合思念体』『禁則事項』のどれにも私はあてはまらない」

ますます分からん。

「超能力者は通常ならば全員『機関』に所属しているはずなんだけど、わたしは所属していない、ということ」

つまり、古泉の仲間ではないということだな。

「『機関』『情報統合思念体』『禁則事項』は、それぞれお互いの意見に賛同したり、もしくは反対したりしている。けど、私はどれの意見にも口出しはしない。」

つまり、古泉、長門、朝比奈さんと、綿雨さんは関係がない、という事でいいのか？

「必ずしもそういうわけではない。口出しはしないものの、正しいと判断される意見をだした場所へ手助けをすることがある。例えば、私は長門さんと共に行動したことがある。」

なるほどねえ。長門や古泉に比べたら分かりやすい説明だ。で、お前は一体何が目的でここに来たんだ？

「キョんくん、あなたを守る為」

はい？俺を守るだって？いつ、何の為に？

「涼宮ハルヒの活動を活発化させるために、情報統合思念体の急進派、あなたが知っている範囲なら、『朝倉涼子』のような存在があなたを狙っている」

おいおい、そんな冗談はやめてくれよ。

「だったら長門さんに聞けばそれはすぐに証明される。つまり今回はキョンさんと長門さんの味方ってわけ。」

そもそもお前はただの人間なんだろう？長門と違って槍で刺されたら一発なはずだ。

「平気。それに今回は長門さん1人で対応しきれる人数じゃない。だからわたしはここに来たの」

「念のため聞いておくが、その俺を狙う敵とやらは何人なんだ？」

「10人。手をかして。」

俺は長門の知り合いなら特に問題ないであろうと思い、手を差し出すと、綿雨さんは手を握ってきた。何だ？突然。

そのとき、俺の体から一瞬力が抜けた。何がおきたのか確認もしていられなかった。

その一瞬でなんと学校の昇降口へ移動していたのだからな。

「なー」

俺は絶句した。そして綿雨さんには靴をはいてと急かされたので下駄箱から靴をだし、履いた。そしてまた5回程ワープ。5秒もしないうちに長門のマンションに到着した。

綿雨は708と押し、そして・・・

「長門さんですか？綿雨です。HUMTELE0953」

綿雨さんとやらが謎の識別番号なのかよくわからないことを言った瞬間「入って」と帰ってきたのだった。

708号室のドアをあけると、長門が中へいれてくれた。

おれは机しかない殺風景な場所へ入っていった。もう隣の部屋で俺と朝比奈さんは寝ていないはずだ。今はそんなことはどうでもいいが。

「綿雨さんから聞いたんだが、俺を狙うやつがいるって本当か？」

「そう」

「それは10人程度なのか？」

「そう」

「綿雨さんがいったことは信じてしまっても問題ないのか？」

「問題ない」

「どうやら、綿雨さんの言ったことは偽りではないようだ。それで、日時はどうなんだ。」

「日時の特定はできない。もしかしたら発見が遅くなるかもしれない、その時はあなたの適切な処置に賭けるしかない」

「その適切な処置って何だ？」

「いくつかあつて現時点での特定は不可能。そのうち伝える」

次の日、入団試験の日がやってきた。

綿雨さんは「昨日はいろいろとごめんなさい」と謝罪してきた。相手ハルヒなら許さないだろうが、今回は彼女の可愛さに免じて許してあげよう。いや、許してあげなきゃいけないのだ。

「では、各教科30分ずつよ、始め！」

入団試験は、5教科（内容は中学の内容らしい）とSOS団独自試験である。さて、彼女はいったい頭がいいのだろうか、それとも馬鹿キャラなんだろうか。

ハルヒが採点をしていると、ハルヒは驚きの表情をあらわにしていた。

「すごいじゃない、麻理ちゃん、あなた満点よ！それも全教科！」
SOS団独自のものも満点らしい。ちなみに問題とはこんな問題である。

問：宇宙人対策のためにしておくべきことを1つあげなさい。

例：髪型を毎日かえる。

と、まあこんなものだ。それで満点か。本当に人間なのか疑わしくなってくるね。

「あなたすごいわよ！特別賞として、副々団長の座をあなたに譲るわ！」

「あ、ありがとうございます。」

結局おれは一番下っぱなんだな。今年もこき使われる訳だ。ちなみに、後から聞いた話だが、綿雨さんは何と中学の内申が3年間45点だったらしいのだ。もうコメントのしようがない。

そういえば、長門も昨年の成績は満点だったらしいがな。ちなみに俺は2が多かったな。

「さて、新団員を含めたSOS団は、明日の土曜日、本格的に活動開始よ！」

さて、SOS団の休日の活動なんてものは想像はつく。光陽園駅を中心に怪しいものを搜索するというものだ。結局その通りだった。

「じゃあ、明日の9時、駅前の公園ね！最後に来たものは罰金だから、解散！」

俺は7時に起床、珍しく寝起のよさでは家族一の妹より早く起き、1人で食パンを食べ、歯を磨き、そして暇な時しか見ることのない朝のニュースへ目を向けていた。

時間は7時30分。集合時間まであと1時間半ある。これならば遅刻することはないであろうな。

「今日の天気は晴れ、降水確率は午前・う10・後は・・0パーセント・・う・・・・・」

「あれー？キョンくんもう起きてたの？あれえー？寝てるの？」

妹の声で目がさめた。俺は二度寝してしまったらしいな。時間は・・

「やば、8時40分！」

俺は急いで靴を履き、そして自転車にまたがってペダルをこいでもこれ以上スピードはあがないといわんばかりの速度で駅前へ向かった。

駅前に到着したのは家を出てから10分後である。つまり50分。案の定SOS団の全員がいた。

「遅い！罰金！」

今日も俺のおごりである。

今日は3人ずつに分かれて、北と南で搜索するわ。
俺達はおくじをひいて、そしてグループが決定した。

印あり・・・ハルヒ、古泉、長門

印なし・・・俺、朝比奈さん、綿雨さん

と、俺的にいいグループ分けである。

「キヨン、女の子2人に対して破廉恥な行為をしたら許さないわよ！」

へいへい。分かってるさ。

さて、俺たちは南方向であり、特にすることもないので俺が先頭であるいていると、朝比奈さんと綿雨さんは楽しそうに話していたのだった。あんなに楽しそうな朝比奈さんは久しぶりに見たね。カメラを持ってくれば良かった。

自販機の前を通ったのでおれは声をかけた。

「飲み物でも飲みます？俺がおごりますよ」

「いえ、悪いですよ」

綿雨さんは遠慮したが、別に遠慮することはない。相手がハルヒだったら、まあ自分からおごる、なんてことはしないのだが。

結局は俺が買ってやり、桜の木の下でベンチに座って飲んでいた。

俺は結局そこで寝てしまい、朝比奈さんが起こしてくれるまで、俺はぐっすりと日々の疲れをとったのだった。

月曜日になり、俺はいつも通り学校で登校すると、谷口が後ろから声をかけてきた。

「よう、キヨン」

「よう」

俺は適当に挨拶し、そのまま無言であるいていると、こんなことをいいやがった。

「SOS団に新入部員が入ったんだってな、よくあんな部に部員が

くるもんだ」

何故かは分からないが、お前にいわれると無性に腹がたつ。

「しかもその新入部員が俺的美的ランクAAAの綿雨麻理なんだから嫉妬するぜ」

「勝手にしている。AAAことは朝比奈さんの下か？」

「そう、ちなみに1年にAAAプラスはいなかったな。今年は可愛いのが少なすぎる」

そりゃそうだ。なんてったってこの学校は山の上にあるんだからな。教室前にいくと、そこには何と珍しく長門の姿があった。

「あなたに話がある」

俺は谷口に、そういうわけだからじゃあな！と声をかけた。谷口は俺も！とかぬかしていたが無視だ無視。

「あなたがするべき適切な処置が3つに絞られた」

つまり、もうすぐ俺が狙われてもおかしくないということか。

「で、その3つとは？」

「1つ目は、あなた1人の目の前に急進派が現れたとき」

長門にしては、俺にも理解しやすい説明をしてくれた。

「2つ目は、あなたのそばに私か綿雨麻理がいたとき」

「3つ目は、あなたのそばに私と綿雨麻理以外の者がいたとき」

その3つの話を聞き、そして始業チャイムの音を聞いて、急いで教室に戻った。

月から金まで、面倒な授業を終え、そしてまた土曜日である。

俺は8時30に到着したのだが、数分の差で一番最後だった。だから何故だ。

「きょうは2人ずつ、3方向へ分かれていくわよ！」

と、今日は3グループである。

俺と綿雨さん、ハルヒと朝比奈さん、長門と古泉、という組み合わせである。

俺は綿雨さんと共にあるいていた。

「長門さんから聞いた？」

ああ、聞いたさ。面倒そうだった。

「ふふ、キヨンくんは生きているのと死ぬのとどっちがいいの？」

そりゃあ俺はまだ生きていたいさ。

「じゃあ、やるしかないでしょ」

それもそうだが。と、俺は一般の会話でない会話を普通に行っていると、目の前に谷口と国木田があらわれた。

「よう、キヨン。また涼宮ハルヒと愉快的仲間達の活動か？」

もう1年もたてばわかるだろう、そんなぐらゐ。

「そりゃあ御苦労なこった」

「キヨンも大変だねえ」

同情するならどうにかしてくれ。俺はもう散々だ。

「下がったほうがいい」

急に綿雨さんが俺の前へ出た。何だ？

第3章（前書き）

推敲頑張っています。読み返すと誤字が多いです；

第3章

「下がった方がいい」

綿雨さんにそういわれた。Why?

「ただの俺のクラスメートなんだが？どうかしたのか？」

「それは分かる。けど偽者の確率が大幅に高い気がする」

それは何故・・・俺はふと気付いた。そうだ。谷口は月曜日、綿雨さんのことをA A Aランクであることを言っていた。谷口ならばA A以上の者に会った時は99%の確率でマヌケ面になる。だがそんなことは微塵も感じられなかった。

綿雨さんが前へでる。「ちよつと失礼」、と谷口（偽？）の顔に触り、「x座標を300左へ」と言った瞬間、谷口の顔が消え、新たな顔があらわになった。

「な・・・」

俺は絶句した。偽谷口であろう者が笑った。

「テレポーターねえ。バレちゃあ仕方がない。」

すぐ近くの曲がり角から他に8人も的人数があらわれた。つまり、俺を狙っているのはこいつらか。

「お前に興味はない。そいつを俺にわたせ。」

男は言った。しかし綿雨さんは拒否した。

「断固拒否する」

「ならば力づくで奪うまで」

男達は俺に駆け寄ってきた。言われた通りにすればいいものの、実際にこうなると怖くて動けそうにない。

綿雨さんは俺に触れ、そして俺は1瞬目の前が見えなくなった。

駆け寄った男同士は俺が消えた為に衝突しあった。

ならばこれでどうだ？

俺に向かって男は槍を投げってきた。朝倉のときの机が変化した槍を思い出す。

綿雨さんはレポートで俺の後ろへ移動、俺に触れた。

「x座標を500右へ」

俺は右へ異動く。綿雨さんは前転で回避したが、足に擦った。

「っ！」

多少出血している。そして、綿雨さんが切り出す。

「なら、これでどう？」

綿雨さんはポケットから果物ナイフを取り出し、俺に向かって刺してきた。

「なっ！」

俺は驚きの声をあげるしかできなかった。刺されて、俺は倒れた。

目が、かすむ……………

男は笑った。

「それで逃げようってか。まあいい。目的はそいつを殺して涼宮ハルヒの活動を活発化させること、それが俺たち急進派の目的だからな。回収しろ」

男達は俺に近付いてくる。意識が無くなってきた。裏切り者め……………

「x、yを各50ずらし、上方向へ1000」

綿雨さんがそう言った。俺を持ち上げようとした1人の男が消え、上から落ちてきた。

「ぐっ！」

男は起き上がらなかった。

「こいつ！」

男たちは立ち上がる。

「x座標を109382、y座標を1928340へ」

綿雨さんはまた1人の男に触れ、そいつを移動させた。

その移動した先には、長門の姿があった。長門は口を普通の人間の何倍もの早さで動かし、男の下は爆発した。ちなみに、今は付近に一般住民はいない。

「ようはお前に触れられなければいいんだな」

しかし綿雨さんはすぐに返答した

「実はこういうこともできるんだよね」

「対象物全部をx座標を109382、y座標を1928340へ移動、ただしx座標を107842、y座標を1926243にある物は除く」

そこにいた7人の男が全員長門の前へ、そして全員が吹き飛ばされた。形成逆転である。

「ちっ、覚えておけ、またいつか再度くるだろう。さらに腕をあげておくことだな」

リーダーであろう男は去っていった。

「ふう」

綿雨さんはその場へ座り込んだ

「綿雨さん、大丈夫ですか？」

俺は綿雨さんへ駆け寄った。

「大丈夫。自分移動の為の演算が間に合わなかったけど、この程度で済んだから。それと私は呼び捨てで構わないよ」

綿雨は消毒液と包帯をバックから取り出し、消毒をすると、包帯を巻いた。

そういえば言い忘れたが、綿雨が俺にナイフを刺した時、刃の部分を刺す直前にワイプさせたのだが、柄の先に瞬間接着剤をつけていたため刺したようになっただ。そしてケチャップと絵の具と水でより本物に近付けた血を流したのだった。それに相手は単純に騙されてくれた訳だ。古泉に刺されたと思った時の経験が役にたったな。

綿雨さんは近くにあった手すりを使って立ち上がった。

「長門も、ありがとな」

「別にいい」

やはり無感情だった。

時刻は11時である。長門は再度古泉と合流して、何もなかったように公園へ戻った、俺は綿雨の歩く速度にあわせたため、集合時間より15分遅れた。

「遅いわよ。昼ご飯2人でおこつてね」

俺は反論した。

「怪我人におごらせるのか？」

ハルヒは綿雨の包帯に気付いた。

「あれ、麻理ちゃん大丈夫？」

綿雨は「大丈夫」と返す。本当に大丈夫なのか？

「じゃあ、キヨンがおればいいわ。」

何でそうなる。

「午後の部は、2方向に分かれましょう」

いちいち変えられると面倒なのだが。

それで、結果は以下の通りである。

印あり・・・俺、綿雨、長門

印なし・・・ハルヒ、朝比奈さん、古泉

である。ちなみにハルヒとは、一度も共に行動したことはないのだが。それはそれで運がいいのかもしれない。

さてさて、俺は綿雨の足の怪我や、長門のことを考えて、図書館へ行くことにした。

長門は1年前のように、軽快なステップで本を探し、綿雨も本を探すといすに座って本に集中していた。俺も適当に本を選び、そして椅子で、寝た。

しかし1年前とは違って、長門に加え綿雨がいるために、時間30分前に起こしてもらった。

そして、午前中だけ騒がしかった俺の土曜日は終わったのだった。

日曜日は、宿題、妹とゲームをただけで1日が終了した。

月曜日、もうすぐゴールデンウィークを迎える頃である。ハルヒは授業が終了してすぐ、土曜日に見落としがないかの確認へ行った。俺と古泉は囲碁で勝負、朝比奈さんはヤカンに水をいれて沸かしていた。長門は本を読んでいた。綿雨は机上で教科書を広げていた。

「なあ、俺が殺されたら、ハルヒは動く、と言ったな。何がどうなるんだ？」

まずは古泉が言った。

「神人が暴れ出すでしょうね。それも、我々では対処しきれない程」
続いて長門。

「進化の可能性の新しい発見ができる可能性がある。ただし何が起こるか想像できない為危険」

朝比奈さんは、

「あ、えつと・・・禁則事項です」

綿雨がまとめた。

「そういうこと。とにかく害ばかりで利はないんです。だから私と長門さんは、キョンくんを守ったんですよ」
そうかい。

だが、お前も長門も、そして古泉も朝比奈さんもここかな居なくなったら同じだと思いがな。

「あなたが殺されるより害は少ないの」

「何が害だ。そんなのは関係ない。俺もお前も人間として同じ価値があるってもんだ。勝手に死んだら許さんぞ」

「そう」

綿雨はまた教科書へと目を向けた。

さて、もうすぐゴールデンウィークだ。

涼宮ハルヒの活動 エピローグ

さて、そんな日も過ぎ、今日はゴールデンウィーク前日である。

集まらなくてもいいのに、毎日集まってくるこのSOS団、今日はハルヒが明日からの予定を宣言している。勝手にきめるな。どんだ迷惑である。

「綿雨、足は大丈夫なのか？」

綿雨は目を自分の足へ向けた。

「大丈夫ですよ、出血はおさまりましたし」

ならいい。長門とは違うからな。

ハルヒは相変わらず団長の独断専行で話を進めていた。

「これが、SOS団のゴールデンウィークの日程表。他にやりたいことがあるなら言いなさい。」

紙にかかれていたことは

- ・水泳（室内プール）

- ・つり大会

- ・虫とり

- ・カラオケ

である。全く、ここは小学生の集まりなのか？

「キョン、うるさい。とにかく、明日は午後2時に駅前集合ね！」
やれやれ。騒がしい連休の始まりだ。

エンドレスゴールド

翌日、俺は集合時間の午後2時になる前、俺は妹とくにおもしろくない無名の芸人のショートコントを見ながら、横になっていた。昨日ハルヒの独断専行で予定が決まっている。今日何をするかなんてのは教えてもらってもいないが、そのうち連絡が来るだろう。

そう思った瞬間、俺の携帯が着信音をかなり立てはじめた。こう思うと夏休みの無限ループを思い出すね。

携帯の画面には、「涼宮ハルヒ」と表示されていた。どうせ持ち物かなんかの連絡だろう。

俺が通話ボタンを押して、耳もとへと近付いてくると、休みの日にまで聞きたくもない声が聞こえてくる。

『今日は水着と充分なお金を持参すること、あとあんたは自転車で来なさい。それから、あとの全員に連絡しておいてね、おーばー』
ブチッと音がした。俺はやれやれ、と携帯の電話帳から、古泉、長門、朝比奈さん、綿雨を選び電話した。団長の仕事だろう。

全員に連絡を終えた頃には、もう先程まで見ていた番組は終了していた。

俺はいつでも出発できるように、とりあえず水着と財布を鞆に放り込み、そしてベットで横になっていた。

「キョンくん、ごはんー」と、妹が自分で作詞作曲した「ごはんのうた」を口ずさみながらやってくるまで、俺はベットに変な寝相で睡眠をとっていた。

母親特製の薄味チャーハンを口にいれ、妹が見ている昼ドラを俺もなんとなく見ていた。

無関心で見ていた昼ドラが終わって時刻は午前1時。俺は遅刻しない為に早く出発した。

自転車でのんびりペースで駅前までおよそ20分である。到着した頃にはSOS団団員の姿は見えなかった。

俺は初めておごらなくてすみそうだと思いつつ、駅前のいつもの場所ですわっていると、次に綿雨がやってきた。包帯は昨日まで広範囲にまかれていたのが、今日は一部のみ巻かれていた。

「こんにちは。早いですね」

なんていったって最後のやつは罰金だからな。

次に来たのは朝比奈さんである。

「ごめんなさい、待たせてしまつて」

いえいえ、いつも遅いのは俺ですから、お気になさらず。そして次は長門。

「・・・」

無言である。次に来たのは古泉。

「珍しいですね、あなたが一番最後でないなんて」

そうかい。俺だって早く行こうと毎日努力はしているがな。

これで1時35分。俺が15分前に来て一番最後の理由がはつきりした。

今日はハルヒがおごることになるのだが、どうせあいつのことだ、「団長におごらせるわけ？」とかなんとか言つて逃げるに決まつている。

5分後、ハルヒは光陽園駅から出てきた。ハルヒは俺がいることに驚いたのだろう、少し目を丸くして、そしてこっちにやってきた。

「キョン、あんた珍しいわね、もう来てるなんて」

言うことは同じなんだな。で、今日はどこへいくんだ？

「あんたね、この用意でどこに行くのか分からないの？室内プールよ」

それは誰だつて分かるさ。で、自転車で行くのか？

「何の為にあんたに自転車で来るようにつて言つたのよ。あたりまえでしょ」

俺は再度自転車の鍵をあけた。今回は古泉の自転車にも3人のるだろ。公平だ。

「あの、わたしも自転車なんですか？」

綿雨がハルヒに問いかけた。俺のより1インチ程度低い、水色の自転車に乗ってきたらしい？

「あれ？そんなにここまで遠いの？」

「いえ、家は多分キヨんくんの家が一番近いんじゃないかな？」

そうだったのか？俺は知らなかったぜ

「じゃあ、有希を乗せていってくれる？」

と、言う訳で、俺の自転車にはハルヒ、古泉には朝比奈さん、綿雨には長門が乗っている。

「ビリになったらジューズを全員におごること」

負けてたまるか。

で、俺はビリだった。綿雨には悪いが勝たせて頂こうと思ったが、どこにそんな力があるのだろうか、怪我をしていても軽快に自転車をこいで1等賞。続いて古泉が2番。俺がビリである。

「キヨん、あんた怪我してる女子に負けてどうすんのよ。だらしない」

潔く認めようじゃないか。反論するまでもなかつた。有希は呪文が何かで体重を無くしているとしても、そうでなかったとしてもタイムは30秒差である。

俺はプールで遊んだ後に全員にジューズをおごることになってしまった。

プールへの入場料は全員、自分のだけを購入し、男と女で分かれてあとで合流することになった。

俺も更衣室で服を脱いで、水着を着て、そしてプールへの入り口を開けた。不景気で特に行くところもないのだろう、プールの人口密度は東京の人口密度に匹敵する程だった。

で、俺達はシャワーをあびて、プールへ足を踏み入れた。施設は広く、通常の25メートルプール以外に、流れるプール、水温40の温泉プール、ウォーターライダー、赤ちゃん用の浅いプール、

サウナなど、あげればきりの無い程プールの種類があった。

「よし、まずは競走ね！それい！」

飛び込み禁止のポスターを今年も無視、ろくに準備運動もせず飛び込んだ。こういう自分勝手な奴がいるからルールってのは守られないのだなあ。

「早くあんたも来なさい！」

俺は手首足首だけをとりあえずストレッチして、プールへと入った。このレーンはどうやら25メートル泳ぎきることを目的とするコースらしく、人は少なかった。

「いくわよ！よいい、どん！」

ちなみに、朝比奈さんはヒラヒラつきワンピースの水着、長門は競泳用のような地味な水着、ハルヒは深紅のタンキニで、綿雨はなんか模様のかかれたありがちの水着であった。

ちなみに団員対抗25メートル自由形競走は、いうまでもなく長門が1着、タツチの差で綿雨が2着でハルヒが3着、俺と古泉が同着で4位、朝比奈さんがビリだった。

「有希も麻理ちゃんもなかなかやるわね、あたしもやる気が出てきたわ！もう一勝負よ」

ハルヒがまた切り出したので、俺と古泉と朝比奈さんは蚊帳の外となっておこう。ん、蚊帳の外の使い方ってあつてたっけ？まあいいそれはさておき。

ではレースの実況をさせていただこう。2回戦は長門が1着であり、ハルヒと綿雨の勝負となった。2人は競り合っていたが、急に綿雨のペースが落ち、ハルヒが2着、綿雨が3着となった。

「足が痛くなってきたのですこし休憩しますね」

傷口にプールの水がしみたのだろう。綿雨さんはプールから出て、プールサイドで座っていた。

ちなみにハルヒと長門は5往復して、全て長門の勝利だったために、「あたしも特訓が必要ね、また今度勝負しましょう」と、レースは終了した。

いつのまにか綿雨も復活し、去年の夏休みに共に遊んだ小学生になんと出くわし、そして水球ごっこを始めていた。

「楽しそうですね」

古泉が言う。そんなの見ればわかる。

「微妙に既視感もするのですが、ループはしていないと長門さんに確認済なので、1万回以上過ごした夏の思い出が脳にしっかりと焼きつけられているでしょう」

そんな解説をおれは期待していない。まあ、今回こそハルヒがゴールデンウィークを永遠とループさせることのないよう願うばかりだな。

「キョン、あんたも水球サッカーに参加しなさい」

分かったよ。もう夏休みにやっただろ。1万回も。

俺と古泉が参加すると、長門はプールから上がって本を読んでいた。綿雨も足の怪我の様子をみながら参加したり外れたりした。

小学生の2人が先に帰ってしまったので、ハルヒはウォータースライダーに1人でいってしまい、することのない俺達は暖かい温泉プールに温泉のように浸かっていた。

長門は本を読みながら、足だけ浸かり、俺と古泉と朝比奈さんと綿雨は肩まで浸かっていた。

「ハルヒさん、楽しそうですね」と綿雨。

「それは平和でいいんだが、あいつはいつ何をいいだすかわかりませんからね」

朝比奈さんは、

「今日は特に何もおきなくて、十分楽しめました」

まあ、朝比奈さんが楽しめたと言うのなら、それでいいや。

「流れるプールを泳いで、今日は終わりにしましょう」

ハルヒがひよっこり戻ってきた。最後は流れるプールを流れと逆に1周した。1位はやはり長門、2位が綿雨、3位がハルヒ、4位が俺と古泉、6位が朝比奈さんと、最初通りの結果である。朝比奈さんを除けばこの部の女子は運動能力が高いな。

俺はジューズをおごらされ、そしてハルヒは言った。

「ゴールデンウィークはあと4日。明日は釣り大会をするわ!」

ハルヒはゴールデンウィークにする内容が書かれている紙を取り出し、水泳に×印を書き入れた。

「明日は午前中集合!持参物は充分なお金だけでいいわ。釣り竿は貸してもらっから」

翌日、SOS団対抗釣り大会が行われた。

魚は釣ればどれでもいいらしい。俺は、普通に魚も釣ったが、空き缶やら長靴だと、二次元でしかありえないと思っていたものがドカドカ釣れた。この川はどうやらそれほどきれいではないらしいな。何でもこなす涼宮ハルヒと言えばもう既にバケツが一杯になっていたのだ。

朝比奈さんは、竿に餌をつけるどころか、餌にさわれないでいた。隣にいた俺が餌を竿につけてやって、ようやく釣りを開始した。ところが、朝比奈さんの餌はきままに泳いでいた魚にあっさり食べられていた。

長門は餌をつけて、そして魚をつり、と黙ったまま地道にバケツに魚をためていた。

古泉は、見たくもないいつも通りの微笑みで、魚をつろうとして、逃げられるか釣るかのどちらかだった。

綿雨は、古泉同様ときどき逃げられていたりしていたが、かなりの確率で釣り上げていた。

そんな釣り大会は一瞬のうちに夕方になったので結果発表になった。

「結果発表!みくるちゃん、2匹。古泉くん、4匹。キョン、7匹。麻理ちゃん9匹。有希、12匹。優勝はあたし、15匹」

順位、なんてものは大体決まっているのだから、1位がハルヒだっというのは当然の結果である。

「明日は第二部、虫採り大会よ!」

今日は、虫採り大会という日に限ってなぜこんな晴れるんだといわんばかりの快晴であり、そんな中で虫採り大会が行われた。

虫がごと虫あみを持って、虫採りをするなんて言うものは、実に小学生の遊びであるようなものなんだが、それを俺達高校生がやっているのだから恥ずかしくてしょうがない。

「虫は蝶限定ね。春なんだから一杯いるはずよ、揚羽蝶は2匹として数えるわ！時間は3時間。始め！」

近くの花畑のような場所はモンシロチョウがたくさんいて、虫あみを1回ふるうだけで、運がよければモンシロチョウが3匹一気にとれる。狙うつもりもないが、狙えるかもしれないな。優勝。

朝比奈さんは揚羽蝶を見事に捕まえていた。基本的に朝比奈さんは虫嫌いだと思っていたが、どうやらチョウは普通に触れるらしい。そのチョウと戯れる姿がまたいい。

長門はチョウを捕まえていたのだが、良く見たら違うものもいくつかが混じっている。トノサマバツタとか、チョウでもないものがたくさん入っているのだ。一緒にしてどうなっても知らないぞ。

綿雨はなんと俺が最初に見つけた場所で、5匹一斉にとっていた。こりゃあ負けたな。

ハルヒは見えていない。古泉は1匹ずつ丁寧にとっていた。そして時間になった。

「結果発表！、古泉くん、18匹。みくるちゃん、19匹。有希、25匹。キヨン30匹、そして同率1位で麻理ちゃんとあたし、33匹。やるわね！」

そしてスケジュールが詰まっているといわんばかりの急ぎ口調で「明日は縁日のお祭りがあるみたいだから、今日中にカラオケもするわよ！」

カラオケでは、ハルヒが7割近く歌っていた。歌のうまさは去年の緊急出場したライブで既に知っている。綿雨もまた歌声がきれいで、

朝比奈さんは歌いたくなかったのだろうが、ハルヒに無理矢理歌わされていた。可愛かった。古泉はオンチという程でもなかったが、大批判を受けたのは俺である。
その上ハルヒの独断で何度も延長した為、そりゃあもう料金がとんでもない額になったのはいうまでもない。

次の日は駅前に集合、女性陣の着る着物を選ぶことになっている。実際は去年も購入したのだが、綿雨が持っていなかったこともあって再度選ぶこととなった。

またしてもハルヒが勝手に全員の着物を選び、そして、着付けの仕方知らないハルヒと朝比奈さんは店員さんに頼んでやってもらっていた。さて、かなりの時間がかかるので、俺と古泉は外の自販機で飲み物を購入して飲んでいた。

「どうやら今年のゴールデンウィークは平和なまま終わりそうですね」

そうか？あいつはいつ何をするかわからないぞ？

「でも涼宮さんが突然なにかをしでかすのは、あなたが原因であることもあるのですよ」

心外だ。

「お待たせー！どう？」

しっかりと着こなしたハルヒ、朝比奈さん、長門、綿雨の4人がやっと出てきた。

はい、全員似合っていますとも。ハルヒも性格をどうにかすれば完璧だぞ。

「じゃあ、行きましょう」

着物って夏だと思うんだがな、というコメントは控えておくことにしよう。

町内の予算が余ったのだろう。去年は開催されていなかったはずだ。規模は大きくなかった。

「みくるちゃん、金魚すくいがあるわよ！いきましょ」

ハルヒと朝比奈さんは金魚すくいをやりに行った。長門は去年と同じく、ぼったくり価格800円のお面を購入。綿雨さんは何をしようか迷っていた。

「綿飴でも食べますか？名字と一緒にすし」

「・・・・・・そうですか」

なにか他のことをいつてくれ、ちょっと今自分が馬鹿らしかった。

「あ、ごめんなさい。償いしましょうか？」

何の償いだ。場合によってはしてもらうね。

「あ、そうそう、先日長門さんにもらった涼宮ハルヒちゃんの憂鬱とかいうラブストーリーが・・・・」

別の原作と話をこっちゃんにしていらないか？

「失礼しました」

と、自分の頭をたたく。可愛い。

朝比奈さんとハルヒが戻ってきた。前回と同様、金魚は1匹ずつだった。

朝比奈さんは金魚をじーっと見ていた。こっちも可愛いです。

その後、屋台を回って、3時間もの時間が過ぎた。

「さて、これで予定は一通り終わったわ。明日は休めでいいわよ」
SOS団のゴールデンウィークの活動は終わったのだ。

明日は学校である。おれは明日の支度をして、テレビやゲームをして過ごそうとしたが、珍しくお客さんが来た。

「こんにちは、今じゃ迷惑でした？」

綿雨だ。どうぞどうぞ。

「あれー？キョンくんのお友達？」

「あ、妹がいたんだ。よろしくねー」

「うん、よろしくねえ」

妹よ、よく挨拶できたな・・・・って小さいが一応小6だ。

「それで、用件は？」

端的に聞いた。

「特にないんだけど、家が近いみたいだから、挨拶でもしに」
なるほど。なんなら上がつてもらっても構わないのだが。

「いえ、キヨンくんにも私の家を教えておこうと思って」

「わかった。今からいけるが？」

妹に留守番するよう言い聞かせ、俺は靴を履いて外に出た。

綿雨家は歩いて2分の場所にあった。手頃な一戸建てである。

「家族は？」

「わたしは1人。去年ここに來たの。それと、ここはもう既に長門さんと朝比奈さんは知っているから。まあ、いつ来てもらっても基本的に大丈夫。できれば古泉さんにも教えといてくれますか？」

「わかった。今度伝えておこう」

用件が済んだので戻ろうとしたところ、そこへ朝比奈さんが訪れた。

「あれ、キヨンくんいたんですか？」

「いましたとも。それで、朝比奈さんはどうしたんですか？」

「特にすることもないので、ここへ遊びにきたんですよ」

どうやら朝比奈さんと綿雨は仲が良いらしいな。俺も長居は無用なので今日は家へ戻った。

そして今日は木曜日である。ゴールデンウィークの疲れをのこしたまま、俺はいつもの山道を黙々と登っていたのだが、何かがおかしい。他に登校しているのはかなり前に小さく見えている1人だけであり、後は誰も居なかった。他に人がいてもいいのだが。俺はちよつと心配になってきたので坂道を駆け上がった。前にいたのはどうやら綿雨だったようだ。

「よう、なんかこれを見て疑問に思わないか？」

俺は問いかけた。

「あ、キヨンくんか。うん、そういえばおかしいですね。」

そのタイミングで、電話がかかってきた。

「もしもし」

『キヨンくん・・・また・・・未来に・・・帰れなく・・・ふえん・・・』

「どうしました朝比奈さん？」

横にいた綿雨が電話を変わってほしいというので携帯を渡した。

「どうしましたか？」

『あ、綿雨さん、私、未来に・・・帰れなく・・・なっ』

どうやら朝比奈さんは未来に帰れなくなってしまったようだ。綿雨はゆっくりと言った。

「エンドレス・・・」

「その、エンドレスとは？」

「キヨンくんなら知っているはずですよ。去年の8月頃でしたっけ？」

何で知っているんだ？まあいい。去年の8月は後半を1万何千回もループしていた。

「それがいま、おきているというわけです」

さて、じゃあ何故俺たちは記憶をもっているんだ？あの時は全ての記憶が抹消されたはずだ。

「そこに長門さんがいますね」

「長門！」

俺は大声で呼び掛けた。長門は立ち止まってこちらに振り向く。長門は全てを把握していたのだろう。告げた。

「指定された時間の繰り返しが非完全な状態で行われている」

さっぱりわからんぞ。非完全とはなんだ？

「涼宮ハルヒに近い者は全ての記憶をそのまま受け継いでいる。

日時だけが指定日へ戻っただけ」

俺の国語力じゃ理解不能だね。

「つまり、涼宮さんを除くSOS団だけが、ループしていても記憶が残ったままというわけです」

古泉が追い付いてきた。

「つまり、今我々は、去年の夏の長門さんの立場にある、というこ

とです」

ハルヒめ。また大規模なことをしてくれるよ。お前は今回何をやり残したと言った？宿題は国語の書き取り1ページしか無かったぞ。「宿題はないようですし、涼宮さんがやり残したことを探すのは困難ですね」

学校に到着。昇降口で朝比奈さんが泣いていた。

綿雨が一生懸命慰めている間、俺は話をした。

「一体どうすればいいんだ？」

「それは前みたいにあなたに探してもらうしかないでしょう」

「それはハルヒが居ない時に全員で会議してくれ。俺だけじゃ無理だ。流石に今回は思い当たるフシは無いぞ」

また電話がかかる。着信元は涼宮ハルヒだった。俺はゆっくりと受話器を押した。

『今日は水着と充分なお金を持参すること、あとあんたは自転車で来なさい。それから、あとの全員に連絡しておいてね、おーばー』
「……エンドレスゴールデンウィーク。流石に1万回も繰り返してられないぞ。」

エンドレスゴールド

全員は一度解散、急いで帰宅し持ち物をもって、駅前へ向かった。妹が木曜日が休みで無ければすぐ気づけたのになあ。

後に全員が集まって数分後、ハルヒは光陽園駅から出てきた。ハルヒは俺がいることに驚いたのだろう、少し目を丸くして、そしてこっちにやってきた。既視感だ。

「キヨン、あんた珍しいわね、もう来てるなんて」

で、今日はどこへいくんだ？

「あんだね、この用意でどこに行くのか分からないの？室内プールよ」

それは誰だつて分かるさ。で、自転車で行くのか？

「何の為にあなたに自転車で来るようにって言ったのよ。あたりまえでしょ」

「あの、わたしも自転車です」

綿雨がハルヒに問いかけた。俺のより1インチ程度低い、水色の自転車に乗ってきたらしい？

「麻理ちゃんはどこへ住んでいるの？」

「家の場所は多分キヨンの家の近くにかな」

そうだったのか？俺は知らなかったぜ

「じゃあ、有希を乗せていってくれる？」

と、言う訳で、俺の自転車にはハルヒ、古泉には朝比奈さん、綿雨には長門が乗っている。

「ビリになったらジューズを全員におごること」
負けてたまるか。

で、俺はビリだった。

「キョン、あんた怪我してる女子に負けてどうすんのよ。だらしない」

潔く認めようじゃないか。反論するまでもなかつた。有希は呪文が何かで体重を無くしているとしても、そうでなかつたとしてもタイムは18秒差である。

俺はプールで遊んだ後に全員にジューズをおごることになってしまった。

プールへの入場料は全員、自分のだけを購入し、男と女で分かれてあとで合流することになった。

俺も更衣室で服を脱いで、水着を着て、そしてプールへの入り口を開けた。不景気で特に行くところもないのだろう、プールの人口密度は東京の人口密度に匹敵する程だった。

で、俺達はシャワーをあびて、プールへ足を踏み入れた。

「よし、まずは競走ね！それい！」

飛び込み禁止のポスターを今年も無視、ろくに準備運動もせず飛び込んだ。こういう自分勝手な奴がいるからルールってのは守られないのだなあ。

「早くあんたも来なさい！」

俺は手首足首だけをとりあえずストレッチして、プールへと入った。このレーンはどうやら25メートル泳ぎきることを目的とするコースらしく、人は少なかつた。

「いくわよ！よいい、どん！」

団員対抗25メートル自由形競走は、いうまでもなく長門が1着、タッチの差で綿雨が2着でハルヒが3着、俺と古泉が同着で4位、朝比奈さんがビリだった。

「有希も麻理ちゃんもなかなかやるわね、あたしもやる気が出てきたわ！もう一勝負よ」

ハルヒがまた切り出した。俺と古泉と朝比奈さんはそれを拒否した。ではレースの実況をさせていただこう。2回戦は長門が1着であり、ハルヒと綿雨の勝負となった。2人は競り合っていたが、最終的に

は順位はかわらず、綿雨が2位、ハルヒが3位だった。

しかし3回戦目は、綿雨が足の怪我で3位となった。

「足が痛くなってきたのですこし休憩しますね」

傷口にプールの水がしみたのだろう。

ちなみにハルヒと長門は5往復して、全て長門の勝利だったために、
「あたしも特訓が必要ね、また今度勝負しましょう」と、レースは終了した。

いつのまにか綿雨も復活し、去年の夏休みに共に遊んだ小学生になんと出くわし、そして水球ごっこを始めていた。

「さて、どうしましょうか」

古泉が言う。お前も考えてくれ。

「涼宮さんが一体何をやり残したのかが分からない限り、解決には向かいませんし。それとも、後ろからだきついて”I love you”とでもいいいますか？」

断固拒否するね。

「キョン、あんたも水球サッカーに参加しなさい」

分かったよ。もう先日やったばかりだろ。流石にまた飽きる程では無いがな。

俺と古泉が参加すると、長門はプールから上がって本を読んでいた。綿雨も足の怪我の様子をみながら参加したり外れたりした。

小学生の2人が先に帰ってしまったので、ハルヒはウォータースライダーに1人でいってしまい、することのない俺達は暖かい温泉プールに温泉のように浸かっていた。

長門は本を読みながら、足だけ浸かり、俺と古泉と朝比奈さんと綿雨は肩まで浸かっていた。

「ハルヒさん、一体何がしたいんでしょうか」と綿雨。

「さあな。それを話し合っただろ」

朝比奈さんは、

「それで、どこで話し合いをするんですか？」

まあ、朝比奈さんが楽しめたと言っのなら、それでいいや。

「私の家でしたら、古泉さん以外知っていますよね？でしたら家だと綿雨。」

「そうしよう。古泉はまず俺の家へ来い」

と、俺が決定したところで、

「流れるプールを泳いで、今日は終わりにしましょう」

ハルヒがひよっこり戻ってきた。最後は流れるプールを流れと逆に1周した。1位はやはり長門、2位が綿雨、3位がハルヒ、4位が俺と古泉、6位が朝比奈さんと、最初通りの結果である。こんなものは最初からわかっていただのだからな。

俺はジュースをおごらされ、そしてハルヒは言った。

「ゴールデンウィークはあと4日。明日は釣り大会をするわ!」

ハルヒはゴールデンウィークにする内容が書かれている紙を取り出し、水泳に×印を書き入れた。

「明日は午前中集合!持参物は充分なお金だけでいいわ。釣り竿は貸してもらってから」

その夜、俺達は綿雨の家に集合した。

綿雨は俺達に麦茶をいれてくれた。前は部屋をよく見ていなかったが、テレビもあって、基本的な家具もしっかりそろっていたし、パソコンまであった。

「さて、涼宮さんですが、」

古泉が切り出した。

「現時点では何が時間をループさせる原因になるのかは分かっていません。しかし、あることに関連しているのでは無いか、と僕は考えます」

そのあること、っていうのは何だ?

古泉はくくく、と笑い、

「あなたなら分かっているでしょう。全ては今年の8月に関連しているのですよ、ああなたはあのとき何と言いました?」

俺は確か「俺の課題は、また終わってねえ！」と叫び、そしてS O S団全員で宿題一掃作戦をしたはずだ。

「涼宮さんが、やっていないことといえばそれぐらいだと、僕は思います」

「じゃあ一体何をすればいいんだ？」

「それは僕にもわかりません。あなたが考えるべきでは？」
何でもかんでも俺に任せようとするな。

「長門は、何か知っているか？」

長門は否定の動作。少し沈黙していると、朝比奈さんが、あ・・・あの・・・と言いだした。

「宿題をする、ってことは何かを協力してする、とかじゃないですか？」

朝比奈さんの意見は最もらしい。しかし、次の問題は協力するものに何があるか、ということになるのだが、あいつは何がしたいんだ？

「それは明日までそれぞれに考えてもらおうということで、今日は解散にしましょう。」

翌日、S O S団対抗釣り大会が行われた。

魚は釣ればどれでもいい。俺は、もう一度やり直すことができたのに、空き缶やら長靴だと、二次元でしかありえないと思っていたものがまた沢山釣れた。この川はいくらゴミをとっても無くならない川なんだな。

涼宮ハルヒと言えばもう既にバケツが一杯になっていたのだ。既視感も何も完璧に把握してしまっている。これじゃ面白くも無いぜ。

朝比奈さんは、餌にさわれないでいた。隣にいた俺が餌を竿につけてやって、ようやく釣りを開始。しかしまた、朝比奈さんの餌はきままに泳いでいた魚にあっさり食べられていた。

長門は餌をつけて、そして魚をつり、と黙ったまま地道にバケツに魚をためていた。

古泉は、見たくもないいつも通りの微笑みで、魚をつろうとして、

逃げられるか釣るかのどちらかだった。

綿雨は、どうやらカンを掴んだらしく、先日よりも多く釣っていた。そんな釣り大会は一瞬のうちに夕方になったので結果発表になった。「結果発表！みくるちゃん、1匹。古泉くん、7匹。キヨン、9匹。麻理ちゃん11匹。有希、12匹。優勝はあたし、14匹」順位、なんてものは大体決まっているのだから、1位がハルヒだつていうのは当然の結果である。

「明日は第二部、虫採り大会よ！」

「考えましたか？」

古泉が進行する。

朝比奈さんや綿雨は意見が出せず、長門は無言だった。

「あなたは、何かありますか？」

協力か。何も無いね。……無理矢理宿題とか？俺は述べてみる

「SOS団活動レポート作成、なんていうのはどうだ？」

古泉が腕を組んでいた。

「駄目元で、やってみます？」

まあ、やらないよりいいだろう。

今日は、虫採り大会が行われる。天気は既に知っていたが日本晴れで、そんな中で虫採り大会が行われた。

虫採りをするなんていうものは、実に小学生の遊びであるようなものなんだが、それを俺達高校生がやっているのだから恥ずかしくてしょうがない。それも最近もやったばかりだ。ハルヒ、お前は覚えて無いのかな。

「虫は蝶限定ね。春なんだから一杯いるはずよ、揚羽蝶は2匹として数えるわ！時間は3時間。始め！」

俺はモンシロチョウが集まっている場所でもたモンシロチョウを採っていた。折角だから優勝を目指そう。

朝比奈さんは揚羽蝶を見事に捕まえていた。基本的に朝比奈さんは虫嫌いだと思っていたが、どうやらチョウは普通に触れるらしい。そのチョウと戯れる姿がまたいい。

長門はチョウを捕まえていたのだが、良く見たら違うものもいくつが混じっている。トノサマバッタとか、チョウでもないものがたくさん入っているのだ。

綿雨はなんと俺が最初に見つけた場所で、なんと今日は運よく7匹も一斉にとった。

ハルヒは見えていない。古泉は1匹ずつ丁寧にとっていた。そして時間になった。

「結果発表！、古泉くん、18匹。みくるちゃん、19匹。有希、25匹。キヨン30匹、あたし、33匹、麻理ちゃん35匹。なかなかやるわね！今度やる時は負けないわ！」

そしてスケジュールが詰まっているといわんばかりの急ぎ口調で「明日は縁日のお祭りがあるみたいだから、今日中にカラオケもするわよ！」

カラオケでは、ハルヒに8割近く歌わせた。歌のうまさは去年の緊急出場したライブで既に知っている。同じ曲をまた聞かされた。俺はそれはもうとんでもないオンチだから、大批判を受けた。その上ハルヒの独断で何度も延長した為、そりゃあもう料金がとんでもない額になったのはいうまでもない。

次の日は駅前に集合、全員が着物を持っていたので午後には集合になった。

去年は開催されていなかったはずな祭りに俺達は参加した。規模は大きくなかった。

「みくるちゃん、金魚すくいがあるわよ！いきましょ」

ハルヒと朝比奈さんは金魚すくいをやりに行った。長門は先日と同じく、ぼったくり価格800円のお面を購入。綿雨さんは何をしよ

うか迷っていた。

「綿飴でも食べますか？名字と一緒にですし」

「……………そうですか」

なにか他のことをいつてくれ、ちよつと今自分が馬鹿らしかった。

「あ、ごめんなさい。償いしましょうか？」

何の償いだ。場合によってはしてもらうね。

「と、前のことは全部覚えてるみたいですね」

そちゃあそうである。5日前だからな。

朝比奈さんとハルヒが戻ってきた。前回と同様、金魚は1匹ずつだった。

本来ならば朝比奈さんは金魚をじーつと見ていた、はずであるが、もう前にじーつと見ていたのだろう。今日は視線を前へ向けている。その後、屋台を回って、3時間もの時間が過ぎた。今日は時間がたつのが遅く感じられた。

「さて、これで予定は一通り終わったわ。みんなすることは何も無いわよね」

俺が代表して言った。

「なあ、ハルヒ。SOS団の活動レポートなんていうのを作ってみないか？」

ハルヒは俺を睨んだ。

「はあ？めんどくさいに決まってるじゃ無い。いやよそんなの。明日は普通に休みでいいわ。じゃあ、今日は解散！」

やはりダメか。じゃあ一体どうすればいいんだよ。このまま3回目に突入してしまうのか？

いや待て、宿題のとき、俺はハルヒを誘おうとしなかった。そうだとしたらハルヒが行くと言ったんだ。つまり……

「じゃあ、お前以外で集まってやるからいいよ」

ハルヒが立ち止まる。単純なやつだ。

「なら私も行くわ。ただしレポートは私の指示通りにしてもらおうよ！」

さて、これが当たりだというのは他でも無い。

俺は朝起床、普段見ることのない新聞の日付をみて分かったね。

昨日はハルヒにこき使われたが、ちゃんとループすることなく戻れたのでもいいと思うじゃないか。

「涼宮さんは、『協力』してものごとをすることが余り無いのです」
知ってるさ。

「夏休みも、別に宿題で無くても、涼宮さんは『協力』することであれば何でも良かったんでしょうね」

と、古泉は部屋で言った。ハルヒは今日もいすの上で今後の予定等を自分で決めては宣言している。いつも通りの風景だ。

去年の七夕、ハルヒは短冊を吊るした。『世界があたしを中心に回るようにせよ』『地球の自転を逆回転してほしい』と。もうお前中心に世界は動いているさ。それに、もう地球の自転は西方向へと回っているかもしれないぞ。お前のしらないうちにな。

エンドレスゴールド（後書き）

ハルヒは設定が複雑ですので時々手がよく止まります。

長門の説明文＞キョンの一人称＞ハルヒ＞綿雨＞古泉＞みくるの
順で文章が書きにくいですw

まあ、これからも頑張っていきますので、何卒宜しくお願いします。

感染型五月病

五月病

特に、新入生、新入社員に多く、やる気が失せたり鬱になったりすることがあるものだ。エンドレスゴールデンウィークが終わってすぐ、俺は五月病になっていた。

五月病なんてものになったのは今年が初めてである。きっと去年もなっていたに違い無い。しかし去年はハルヒに散々振り回されたことがあったからだろう、きっと五月病になっていられる暇も無かったのだ。去年よりも落ち着きができたハルヒのお陰で、俺は今五月病になっていられる余裕が出来たのだろう。いや、『お陰』ではないのだが。

妹の「キヨくんごはんー」という合図で俺はようやく椅子から立ち上がり、溜息を尽きながら1階へとぼとぼと降りて行って、ご飯も少ししか食わず、歯をみがいたらすぐベットに横たわっているのが最近の俺の日課である。

学校でも、俺は最近机でぐったりしている。ハルヒはもう既に呆れた御様子で何も俺に言わなくなった。このままこの状態で過ごしていくのか。

朝比奈さんパワーでも俺はたったの5分しかシャキつとまらない。

これはかなりの重症だな、つつくづく感じていたのだった。

俺は机に突っ伏したまま、音だけで全員のしていることを把握した。ハルヒはネットサーフィン（といってもニコニコ動画の観覧）をしている。そのうちMADでも作りましようなんてことを言いそうだ。そう考えないようにと願っておこう。マウスのカチカチ音が耳にはいった。

長門も相変わらず本棚にあるハードカバーの本を広げて椅子にちょこんと座って読んでいた。数十秒おきにページを捲る音が聞こえて

くる。

古泉は俺が五月病になってから囲碁の本を持ってきて練習していた。是非五月病が治ったら練習の成果を見せてほしいものだ。石の音がパチリつと聞こえてくる。

朝比奈さんは、相変わらぬメイド姿で、ヤカンに温度計を入れて丁度いい温度になったところで火を止め、お茶をいれた。朝比奈さんはお茶を俺のそばにおいて、「さめないうちに」と言っておいてくれた。コトンという優しい音が聞こえた。

綿雨もいつも通りで、机の上にノートを広げて、数学？の問題を解いているようである。？が分かるなら是非教えてほしいね。ハルヒに教えられるよりよっぽど効率がよさそうだ。シャープペンシルの音がカリカリと聞こえてくる。

長い沈黙の末、ハルヒが騒ぎ出す。机をドンツと叩いては、

「何なのよ、キョン！あんたいい加減に五月病を克服しないと、殴って強制的に治すわよ！」

そんなんで治るんだったら是非やってもらいたいね。俺が思うに、ただ単にケガをして余計鬱になるだけだと思うが。

そうそう、ケガと言えば、綿雨だがつい先日、足の傷がかさぶたになっただけで、包帯をとっていた。見るからに痛々しいのだが。

「そういえば、麻理ちゃんの文のパソコンが無かったわ、これからコンピ研にもらいにいきましょ。麻理ちゃん、キョン、来なさい」

おいおい、コンピ研はフリーパソコンショップでも何でも無いぞ。

「コンピ研の諸君、新入部員用のパソコンをもらいに来たわ！」

そこには3年に進級したコンピ研部長が顕在していた。

「もうやれるパソコンなんてないぞ！」

諦める、ハルヒ。もう5台も頂いてしまっているのだ。流石に6台目は無理に決まっている。

「じゃあ、麻理ちゃん、ちょっと来て」

ハルヒは綿雨の手を引っ張って部長の目の前へたった。この展開は

……
予想通りである。部長の手をとつさに掴み、そして綿雨さんの胸へ

……
「待て、ハルヒ。朝比奈さんの二の舞にはさせんぞ」

俺はハルヒと部長の腕を掴んだ。部長は安堵の息を吐いていた。そして部長は仕方ないと、

「この The Day of Sagittarius 4 の対戦で勝利したら1台進呈しよう。ただし、ノートな。その代わり、我々が勝利したら、パソコン5台中ノート4台を返却して頂く」

ハルヒはもう既に勝った気でいるらしく、

「いいわよ。もう変更は無しだからね」

といって、部屋を出て言った。コンピ研は前回同様パソコンを優先でサーバーに接続して、そして出て言った。対戦日は一週間後である。

3の続編である4は、3と操作方法はさほど代わらないものの、新機能として「スパイ機能」がついている。これは、相手がこれから何をしようとしているのかを探ることのできる機能らしい。

さて、コンピ研には新入部員がいらないので、5対5である。

前回あまり役にたたなかった朝比奈さんは残念ながら除外され、綿雨が参加した。

ちなみに、パラメーターは以下の通りである。

<ハルヒ 閣下 艦隊> 『速度・30』 『防御・60』 『攻撃・20』 『射撃・20』

<キヨン艦隊> 『速度・30』 『防御・30』 『攻撃・40』 『射撃・30』

<古泉くん艦隊> 『速度・50』 『防御・30』 『攻撃・30』 『射撃・20』

<ユキ艦隊> 『速度・40』 『防御・25』 『攻撃・45』 『射撃・20』

<麻理艦隊> 『速度・30』 『防御・25』 『攻撃・45』 『射

撃・30」

このパラメーターは長門と綿雨で計算したようで、俺が平均タイプ、古泉が視察タイプ、長門が視察&攻撃タイプ、綿雨が攻撃タイプ、ハルヒが防御タイプである。これは結構無難であるな。

綿雨は説明書を熟読し、1回目から敵艦隊を1つ破滅させる等の活躍を見せた。俺達も半年やっていなかったために多少の勘が鈍っていたが3日程で取り戻した。

そしてついに決戦の時がやってきた。俺といえば、すっかり五月病を克服していた。ゲーム効果なのだろうか。

ちなみにハルヒが考えた作戦は、突撃 大作戦で却下され、今回の作戦はハルヒ除く4人で考えたものである。

まず、長門と古泉が分艦隊を利用して敵を補足、俺と綿雨で攻撃していくと言うものだ。敵5vs味方4であるため、前回に比べれば難易度は低い。

十六時〇〇分、開始の効果音と共に、古泉と長門が前進して搜索を始めた。5分後に敵艦隊を2体補足した。

俺と綿雨は出発し、ハルヒはその場でしばらく待機した。2分後、俺と綿雨は相手艦隊の近くへ到着した。

リーダーである艦隊Aの姿は無く、BからEの4艦隊がいた。1対1でわかれて、対戦していた。しかし、見た感じでは、俺には平均的なもの、長門の艦隊には攻撃特化型、古泉のには防御特化型、綿雨のには速度、攻撃特化型にマークされている。

「対戦の組み合わせを変えた方がいいんじゃないか？」

俺は全員に告げる。ハルヒといえば「おされてるじゃ無いの！しっかりやりなさい！」と騒がしいが無視だ無視。

4人はうなずき、対戦の組み合わせをかえるため、移動した。ちなみに朝比奈さんは、お茶をいれて俺達の横においてくれた。水分補給はそれで行っている。兼応援でもあるので、俺は朝比奈さんの応援にも励ましてもらっているさ。

しかし敵艦隊は、マークした者をそのまま狙い続けていた。このままじゃ押されたままである。

長門と綿雨は分艦隊を作り、敵を囲む形にして砲撃を試みていた。すると、敵艦隊の対応が遅れ、見事に敵の艦隊数を大幅に減らしていた。

「有希、麻理ちゃんやるじゃない！キョンも古泉くんも流れに乗りなさい！」

ハルヒだけが騒いでいる。隣の部屋に丸聞こえのはずである。

ちなみに、今回は長門はコマンドプロンプトを立ち上げておらず、向こうは何も卑怯な真似をしていないと思ったのも束の間、今日は綿雨がそれを立ち上げていた。

「綿雨さんとやら？あなたは一体何をしているのですか？」

「これを見れば分かるよ。コンピ研のソフトウェアとわたしたちのソフトウェアのプログラムの同じ行なんだけど……」

どうやら同じ行であるっぽいのだが、良く見ると所々が違っていた。「実はスパイ機能、相手はこっちのステータスが見れるけど、こっちは相手の行動しか見れない設定になっているの」

うむ。Understand.それで、どうするんだ？

「書き換えるでしょ？もちろん」

「いいぞ、と言いたところだが、まず証拠がこれ以外に無いのだが……」

「ある。例えば、わたしの艦隊が攻撃をやめて撤退すると……」

<麻理艦隊>が撤退すると、近く of 古泉艦隊に攻撃すること無くわざわざ遠くユキ艦隊>を狙いに言った。その艦隊は速度・攻撃特化であるから、防御の低いユキ艦隊>にとっては相性が悪い。

つまり、これが証拠らしい。まあ、考えればそうなるのか。

「ならいいぞ、やつちまえ」

俺が言うと綿雨は微笑み、なんとその表情のまま長門同等の早さでプログラムを入力しはじめた。これで普通の人間なのか？もう超人

である。

10分後、全ての言語を打ち終えた綿雨はエンターキーを押して、プログラムを改正した。さらに、パラメータを俺のを長門へ、長門のを綿雨へ、綿雨のを俺へ、古泉はそのままで移し替えた。つまり、
<ユキ艦隊> 『速度・30』 『防御・30』 『攻撃・40』 『射撃・30』

<古泉くん艦隊> 『速度・50』 『防御・30』 『攻撃・30』
『射撃・20』

<麻理艦隊> 『速度・40』 『防御・25』 『攻撃・45』 『射撃・20』

<キヨン艦隊> 『速度・30』 『防御・25』 『攻撃・45』 『射撃・30』
となった。

「おい、ハルヒ、そろそろ決着をつける頃だ、出ていいぞ」

というと、綿雨の説得により珍しく大人しくしていたハルヒが「よし！ やってやるうじゃないの！」と言って動かした。

形成を逆転、艦隊B、Dは長門と綿雨によって壊滅、俺も到着したハルヒと共に敵艦隊Cを撃破、5人一斉攻撃でEも撃破し、そして艦隊Aのところへやってきた。

艦隊Aを、こちらの総合計艦隊数が減る5倍の早さで艦隊を攻撃し、そうして決着はついた。十七時〇五分である。

十七時十〇分、コンピ研部長が、ノートパソコンを持ってやってきた。

「やはり君たちには勝てないな。またプログラムを対戦中に変えられてしまった……。これもまた彼女か？」

部長は長門へと目を向ける。

「いえ、今日はあそこにいる彼女です」

俺は綿雨の方へ目を向けた。綿雨はもう机にノートを広げて、自分の世界に入っていた。

次の日、俺は朝靴箱をあけると、封筒が入っていて、『綿雨麻理』と書かれていた。入っていた手紙には、『昼休み部室に来て下さい』と書かれていた。

俺は、昼休みになったとたん、急いで教室を飛び出し、そして部室へを向かった。ノックをすると、「入っていいですよ」と律儀な返事が帰ってきた。

「用件って言うのは何なんだ？」

綿雨は言った。俺の耳がおかしくなければ、こう。

「わたしがここに来た理由、この前は、『キヨンくんを守る為』と言いましたよね。」

そう言っていたな。綿雨も俺をキヨンと呼ぶのか、と思ったぜ。

「実は、本当の理由は違うんですよ。それを今から説明しますね」

「あまり聞きたく無いが、まあいい。教えてくれ。」

「わたしがここに来たのは、涼宮ハルヒの暴走を止める為」

だいたい想像はつくが。古泉も似たようなもんだろう。

「いえ、わたしは根本的にハルヒさんの暴走を止めることです。」

・・・どういうことだ？

「つまり、ハルヒさんが一切暴走をしなくなるようにすることなんです。」

・・・

「これは未来、情報統合思念体、機関にとっても利益になります。安全に涼宮ハルヒの観察をすることが出来ますから。逆に活動を活性化させて観察した方がいいと考える人もいますけどね」

俺は何も言えなかった。確かに説明は分かりやすいのだが、言葉が見つからなかった。

「それと、キヨンくんがハルヒさん選ばれた理由は不明でしたよね？」

そうそう。俺も何故なのか知りたいと思っていることだ。

「それは、キヨンくんの言動に原因があると、わたしは考えます」

どういうこつた？

「『宇宙人対策』に覚えがありますか？」

覚えているさ。毎日髪型を変えたハルヒに「髪型を毎日変えるのは宇宙人対策か？」と聞いたはずだ。

「それです。毎日髪型を変える理由に気付いたのは、キョンくんが初めてだったのですよ。結果として、それはハルヒさんがキョンくんに興味を示す1つの原因と考えられます」

待て、その理由だけで入団させられたと言っことか？俺は。

「でなかったら、その後も毎日ハルヒさんはキョンくんと話そうとはしませんよ」

ちよつと待つてくれ。それを何で知っている。監視でもしていたのか？

「監視……ですか？キョンくんは、ハルヒと話すようになったその日から、数十もの人々に監視されていますよ」

どうやら俺は疲れてしまっているらしい。ハルヒがいるだけで世界はもうぐちゃぐちゃだな。

「その監視する者の中にはキョンくんを狙う者もいる。だからわたしや長門さんがいる。それだけです」

もういい。こんな話はもううんざりだ。やめてくれ。頼むから。

「ごめんなさい、疲れさせてしまった様ですね。実はわたしにはもう1つ力があるんですよ」

綿雨は近付いて俺に触れて来た。今度は何をしようというのか？

途端、俺の肩は急激に軽くなり、疲れもとれた上に落ち着きを取り戻して来た。これが力か？

「落ち着き効果をもたらせるんですよ、同時に疲れもとれます。そうそう、ハルヒさんがあなたを選んだ理由、他にもあると考えられますがそれはまだ不明です。」

それは便利な能力だ。できれば毎日やってもらえれば助かるんだが……。

「毎日すると、依存症になる上に身体に影響を滅ぼすので推奨はで

きませんよ。では、失礼します。それと今回の話は知ってもらいたかっただけ。信じるかどうかは任せますから」

綿雨はそう言うのと部室から出ていった。

長門は、涼宮ハルヒを観察すること。古泉は、閉鎖空間をどうにかすること。朝比奈さんは、詳しくは覚えていない。綿雨は、ハルヒの暴走を根本的に止めること。か。

俺は妙に落ち着きを取り戻した頭を整理して、そして教室へ戻ったのだった。どうやら長門は、綿雨に頼まれて退出していたようだ。

次の日、俺はコンピ研にお邪魔した。先日もらったパソコンの電源コードを受けとって無かったのだ。中にはいつもより様子のおかしい部長の姿があった。

「そこにあるから持っていつてくれ」

他の部員も同様で、かなりぐったりしていた。パソコンの電源も入れず、机に突っ伏していた。

「どうかしました？」

「いや、最近なにもする気になれなくな」

「五月病ですか？大変ですね」

とりあえずそういつて、俺はコンピ研部室を後にした。しかし俺は次の日とんでもないことを目撃することとなる。

それは朝の登校時からである。谷口を見かけて声をかけたのはいいが、返事に元気が無い。周りを見ても、全員氣力を失ってしまっている。

教室へ入ると、到着していた生徒は全員机に突っ伏している。かなりだるそうだ。

唯一、しっかりと座っていたのはハルヒだけだった。俺は2年になつてもハルヒの前の席である。そこへ自分の荷物をおくと、まっ先にハルヒが話し掛けて来た。

「みんなどうしたのかしら。元気なさそうね」

見ればわかる。これはどう見たつて五月病だろうよ。しかし、全員

がこうなるなんてことは普通あり得ない。誰か他になっていなさそうな奴……そうだ、長門だ。

俺はハルヒに待つようお願いしておいて、文芸部室へ向かった。そこには朝から本を読む長門の姿があった。

「長門は元気だよな？」

肯定の仕草。俺は少しほっとする。

「これは一体なんだ？生徒全員が鬱になっているぞ。教員もそうらしいが」

「感染型五月病、と情報統合思念体では判断した」
感染型五月病？

「そう」長門は補足した。「感染型ウイルスが原因の五月病。そのうち誰もが動かなくなる」
それはかなりまずいな。

「そう。しかし潜伏期間は1週間程。たてば治る。しかし餓死の恐れがある」

誰だ？こんなのをしたのは。

「涼宮ハルヒを観察するもの。放っておくと暴動を起こす。しかし放っておくしか治す方法が無い」

じゃあどうすりゃいい。

「最終手段はある。」

じゃあ早くいつてくれ。

「綿雨麻理の能力をつかうこと。しかし推奨はできない。彼女に大きなダメージを与える。するかどうかはあなたの決断と、彼女の承諾次第」

俺は迷った。そのままにして敵の襲撃を許すのか、綿雨に対処してもらうかどちらかである。普通なら迷うところでは無いだろうがな。

「わたしなら大丈夫」

気付いたら綿雨がいた。

「だから、キョンくん、ついてきて」

俺はハルヒを誤魔化して家に帰り、そして夕方、実行した。

1年1組から順に能力を使用した。全てで27クラスある。かなり大変である。

その上、半分が終了した頃には、綿雨の足取りも重くなってきたし、3年生へいったところで、俺の補助なしには歩けなくなっていた。そして教員まで復活させたところで、綿雨と俺は部室へ戻った。

部室へ入り、鍵を閉めた途端、綿雨は倒れた。

「長門、どうしたらいい？」

「とりあえず目を覚ますまでねかせておいて」

俺はブレザーを脱いでかけてやると、長門と俺で座っていた。

午後7時、綿雨はやっと目を覚ました。

「ここは……」

「部室だ」

綿雨は立ち上がって、ゆっくりと部室から出ていった。俺は長門にも頼んで、一緒に家まで送っていった。

また借りをつくってしまったな。長門にも綿雨にも、一体俺は何を返せばいいのだろうか。

綿雨はその後1週間学校を欠席した。俺と長門と朝比奈さんで毎日お見舞いにいってやった。4日もたてば元気を取り戻したようだ。生徒約1080人+教員の疲れを4日でほとんどとってしまったようだ。一体どんなからだのつくりをしているのだろうか。

そして、俺は先日の綿雨がいつていたことを信じなければならぬ状況であるのだ。

感染型五月病（後書き）

今回の話で、綿雨のある程度のキャラ設定は述べられました。
ちよつとまとめておきますね。

名前：綿雨麻理

目的：涼宮ハルヒの暴走を根本的に止める為

能力：テレポート、癒し効果のある能力

学級：1年5組

というような設定ですね。さて、次回ですが、朝比奈みくるの冒険
Episode 01 の映画撮影の話になります。

涼宮ハルヒの想像 プロローグ

季節は6月。もう梅雨入りすることの話である。

綿雨はすっかり健康状態良好になっていて、普段通りの姿は俺を安心させてくれた。

朝比奈さんは、ちょっと高いけど自腹をきって買ってくれた雁音というお茶をいれてくれた。

俺はそれをゆっくり味わいながら、本当に少しだけ腕をあげた古泉と囲碁の勝負をしていた。

長門はいつも通り本を読んでいるし、ハルヒがいないだけでとても静かなこのSOS団部室である。それが、ハルヒが来た瞬間、北海道から沖縄に来たみたいにならつと空気が変わるのであ…

「第2弾の映画撮影をするわよ！」

ついに来た。昨年の冬、大森電器店からスポンサー料の前渡しをもたらってしまったので映画撮影をしなければならないのは分かっていたが何もいまさら

「学園祭は11月だろ。別に今とらなくても」

「ダメよ。映画っていうのはなかなか前から時間をかけて撮るものよ。去年は失敗したわ」

脚本と演出がお前である限りおれは参加しかねるね。

「安心しなさい。今回の脚本と演出は麻理ちゃんに一任するわ」

いつもお前1人でやりたがるのに、珍しいこともあるもんだ。

「実は麻理ちゃん、中学の全国大会の作文コンクールで3連破らしいわ。そのようなタマゴを使わないでどうするの？」

タマゴはよかったな。監督はお前なのか？

「それはそうよ。でも脚本と演出は作文全国1位の麻理ちゃんよ。

媒体は違うけど、これならC級が越えられる映画を作れるはずよ！」

それは流石に無理な話だ。しかし、綿雨が成績優秀で助かった気がする。

見れば、既に綿雨の手元には山積みになされた原稿用紙があった。

「ちなみに、映画は前回の続編。役柄は一緒。強くなった有希が帰ってくるのよ。今回はキョン、あなたも一部出演させてあげるわ！喜ばないさ」

俺は別に出たいとも思っていないんだが。

「それと、新キャラに少し人数がいるのよね。他のメンバーもどうにかしてくれない？」

じゃあ谷口と国木田と鶴屋さんでいいだろ。

「そうね、あの2人と鶴ちゃんでなんとかなりそうだわ。あとは、そうだ！あんたの妹とシャミセンも出演させてあげなさい」

へいへい。

「麻理ちゃんは出番が少し少なめになっちゃうんだけど、それだけじゃ可哀想だからEDを歌わせてあげるわ」

綿雨は苦笑いして「わかりました」と言っていた。

「じゃあ決まりね、早速明日から撮影よ！じゃあわたしは準備があるから。麻理ちゃん、これは配役だから、これでよろしくね。それじゃあ」

綿雨の手元においていった配役を見た。

朝比奈みくる・・・未来から来た戦うウェイトレス

古泉一樹・・・超能力者

長門有希・・・宇宙人の魔法使い

綿雨麻理・・・鍵を握る女の人

男（未定）・・・有希の仲間

男（未定）・・・朝比奈団の団員

女（未定）・・・みくるの友達

キョン・・・脇役

シャミセン・・・有希の猫

妹・・・朝比奈団に迷いこんだ少女

俺が一番出番がないじゃ無さそうじゃないか。まあ、あっても別にいいことなんてないんだがな。雑用の方がまだ楽だからな。

「綿雨さん、脚本は面倒ならばハルヒにやらせればいいんですよ」
「言うのもなんですがわたしの脚本とハルヒさんの脚本、どちらが
いいですか？」

「そりゃあいわなくても分かるだろう、綿雨の方に決まっているさ。」

さて、また事件がおきなければいいのだが。

涼宮ハルヒの想像

考えてみれば、綿雨がきてから長門の負担が減ったような気がする。昨年までは何かがあればよく長門を頼りにしていた。おかげで長門がバグっちまったわけだ。そう考えると俺は負担が減ったのはとてもよいことでは無いかと思っている。

だがしかし、逆に出番がなさすぎるのもどうかと思う。そうしたらここにいる理由が無くなってしまうではないか。

今回の映画でも昨年の映画と同じ配役になっているので（新キャラ登場を除けば）長門も多少の活躍があることだろう。

しかし、最も俺が願っているのは、ハルヒがまたとんでもないことを犯さないこと、そして長門と古泉と朝比奈さんとそして綿雨が何の能力もない普通の人間になってくれることだが、それはあの一件以降どうでもよくなってしまうたりよくなかったり。

さて、ハルヒに押し付けられて脚本を一生懸命に書いている綿雨だが、1日で書き上げるといえるのは無理な話である。それに完成しても一度ミスがないか、設定がこんがらがってしまっていないか推敲までしなければならぬ訳で、思いつきだけで撮影していた去年の映画は設定がぐちゃぐちゃで、名の知れている国語教師や教授だつて理解するのに何度も見直さなければならぬようなものだったからな。

それに、30分の映画をつくるにしても、原稿用紙10枚じゃ全然足りないのだ。ただ単に本を発行するのと違うんだぜ。小説からアニメを作るにしたって、30分のアニメで小説の1話分しか使わないのなら少しはオリジナルを混ぜなければならぬことだつてあるはずである。かといって俺は映画監督でも何でもなし、アルバイトにもありそうな映画の雑用ばかりやらされてきた立場だから実際原稿用紙何枚分になるのかは最も知らない話だ。……原稿用紙10

0枚くらいか？

脚本を書きはじめて30分が立つだろう。彼女は作文のネタはぱぱっと思いつく方なんだろう。もう原稿用紙5枚目にいつている。手元にはメモ帳を用意して、作った設定をメモして、その内容に違いないように確認しながら書き進めている。俺だったらそんなの考えないな。設定に違わないように注意はするが、さすがにメモ帳まで使うことはないな。

俺はどんな内容が書かれているのか横目でみる。書くスピードは早いが綺麗な字である。ちょうど見た時、『キョン子登場』と書かれていた。

「それは無しな」

俺が横から消しゴムで消すと、綿雨はうちの妹が確信犯である時のような表情を作った。確信犯である。普段はこんな性格だから、あの戦闘は本当に綿雨と思えないのだが……。

「どうぞ」

朝比奈さんはまたお茶をいれて、そして綿雨の書いている原稿用紙の近くへおいた。すると朝比奈さんは綿雨の耳元でなにやら話していた。朝比奈さんのことである。多分、自分が嫌なことはしたくないのだろう。綿雨は頷いていた。ハルヒであるならばそう言われようがオーストラリアのエアースロックのように頑固で意見を変えないであろう。しかし綿雨と朝比奈さんは出会ってから仲が言い。先輩後輩の立場まで無くなってしまっているように見える。

もちろん朝比奈さんがとんでもない目にあわされるのは俺も反対だ。朝比奈さんが傷つけられるやつがいたら絶対に許さない所存でありますとも。

現在午後5時半。ハルヒが部室を出ていつてから1時間が経過している。綿雨が書いた枚数はどうやら今が絶頂期らしく30分で8枚も書いて13枚である。

それだけ書いておけば明日の撮影は原稿用紙13枚も使わないだろう

うし、とりあえず十分であろう。

しかし、綿雨は書く手を止めていなかった。自分の能力の効果があ
るのだろうか、手首に疲れている様子を感じさせていなかった。

俺とは言えば暇になったので古泉とオセロでもしていた。現在は白
が優勢である。古泉は全く成長していない。オセロに本なんてない
からな。頭の使いようなんだが、小泉は頭が固いのだろうか。

長門はずっと本を読んでいるし（目は疲れないのだろうか）、朝比
奈さんは30分おきに冷めているお茶を捨ててもう一度いれていた。
これも、いつも通りの風景である。

現在午後6時。完全下校時刻である。しかし、脚本をずっと書いて
いる綿雨だけではなく、俺も長門も古泉も朝比奈さんもその場に残
っていた。

俺は古泉と今度は囲碁をやっていて、長門は読み終わった本をしま
って別の本を棚から選んで取り出し、また座って読んでいた。4月
に文芸部に資金が入った為多少新しい本が増えている。ちなみにS
OS団には資金は支給されていない。

朝比奈さんはパソコンを珍しく起動して、ガイドブックを片手に使
いこなせるように頑張っていた。真剣な表情がまたいい。

ちなみに、綿雨が書いた枚数は現在19枚で、綿雨は時々手首の運
動をしていた。さすがに1時間半も書いていれば疲れるのは当然の
ことである。

現在午後6時半。誰も帰る気配がないので、俺は家へ遅くなると言
う旨を電話で伝えた。電話には妹が出た。「もしもしキョンくん？」
とな。携帯番号分かっているもとりあえず名前の確認くらいしよう
な。もし俺の携帯を盗んでオレオレ詐欺をしようとする奴がいたら
どうする。確実に被害にあっているぞ。

どうやら7時になるのが8時になるのが誰も帰る気配すら感じさせ
ない。きつと綿雨の頑張っている姿をみて自分1人だけさつさと帰

つちまう気になれなかつたんだろうな。俺だってそうだし。

俺は率先してコンビニでも行って弁当でも買ってくるかと立ち上がる。すると綿雨が財布を取り出して、

「これで」

と言ってきたので、俺を一度受け取ったが返した。朝比奈さんと長門とお前の分はおごつても別にいい。ハルヒと古泉には別におごる気にもなれないが。

俺は学校を出て、コンビニへと向かった。ちなみにコンビニへは山道を一旦下らなければならない。それと、我がSOS団がよる遅くまで部活動をして指導されたことは無い。顧問なんてのがいないし、そもそも同好会として認められているのかも定かでは無い。その上もう既に呆れられているのだろうな。

俺は山道を下ってすぐ近くにあるコンビニに入って適当に弁当を購入入して、持ちかえった。ちなみに温めてもらっていない。SOS団には1人暮らしが出来てしまう生活必需品がいくつかあるからな。電子レンジだってある。

かえって来た頃にはもう既に教師がおらず、ドアに施錠されていた。俺がSOS団部室の近くで「おい」と叫んでやると古泉が下まで下りてきて入り口の鍵を開けてくれた。

俺は部室へ戻り6月なのに外が寒いからと昨年もらったストーブをつけて暖まりながら、弁当を1個ずついれてレンジで温めて、全員の所へ置いた。

「ありがとうございます」「ありがとうございます」「有難うございます」

と綿雨、朝比奈さん、古泉。長門は軽く一礼しただけだった。

古泉は机の上の囲碁板を片付けて、朝比奈さんは再度お茶の用意をして、長門は本をしまって、綿雨は原稿用紙（現在32枚）をよせて、そして全員で食べはじめた。全員が同じことしているのだから、ちよつとぐらい会話があつてもいいのだが、全員無言である。空気が重い。俺から切り出そう。

「朝比奈さんと綿雨は2人で最近いますけど何をしているのですか

？」

朝比奈さんから答ええてくれた。

「私は綿雨さんに去年あったことを話しています」

「わたしは7割は知っていますけど、朝比奈さんは可哀想ですね。同情します」と、綿雨。

「7割知ってるって、もしかしてあの夏休みのループのころも？」

「それは気付きませんでしたね。知っているのはループを抜け出した回しか」

さすがに宇宙人ではないから、それは気付かなかったか。

「あの時といい、今回といい、ループを抜けだせたのはあなたのお陰ですよ」

古泉が顔をよせてくる。近付けるな。

「長門、お前は退屈じゃ無かったのか？」

長門は答えなかった。

午後7時半。食事を終えた5人は、またそれぞれの世界へと入っていった。

古泉と俺は今度は朝比奈さんをまぜてすぐろくを、長門は本に浸っていた。綿雨は現在原稿用紙40枚に入ったところである。

さて、いつまでたっても同様のことしかしていないのだし、ちょっと省かせてもらおう。

午後11時。全員帰宅をしようとしめない。綿雨は少しペースを落とし、原稿用紙74枚を書き終えた。この人は1日で本1冊を書き上げてしまうんじゃないか？

まあ、ただ単にアクションの方法と言葉しか書かれていないのだが。

午前2時。俺はどうやら寝てしまったらしい。目がさめると綿雨が終盤に入っていたところである。古泉と朝比奈さんは寝ていて、長門は何とまだ本を読んでいたのだ。やはり宇宙人につくられた人造

人間というものは、寝なくてもいいのだろうか。

ちなみに俺の背中には毛布がかかっていた。それは朝比奈さんも古泉も同様だ。寝てしまったのを見て長門が綿雨がかけてくれたのだろう。

俺は目がさめたからといって起きる気にもなれず、そのまま夢の世界へと入っていった。

午前6時。目を覚ますと、古泉と朝比奈さんと長門は起きていて、綿雨は寝ていた。ちょうど朝比奈さんが綿雨に毛布をかけたところだった。朝比奈さんは昨日俺がコンビ二でかっってきたパンをレンジを使って焼いていた（というより温めていた）。

疲れているだろうと思って綿雨はそのまま寝かせておいた。もう学校にいるのだから、HR開始の30分前に起こしてパンを食べさせればいいだろう。昨日見た朝比奈さんの寝顔と綿雨の寝顔はもう見られないであろう。長門は寝たらどうなるのだろうか。

4人はパンを食べて、ハルヒがどこからか持って来た小型のワンセグテレビをつけて（近くに中継局があるので受信可能）朝のニュースを見ていた。

午前7時半。綿雨を起こしてやって、あとは朝比奈さんがやってくれるらしいので任せておいた。ちなみに原稿用紙は余ったのが1枚だけで、書き上げた枚数は数えてられないくらいである。

俺は教室へ向かう。ハルヒはもう既に机に頬杖をついて座っていた。「よう、全員で泊まり込みしてたんだぞ。徹夜までして」

さて、ハルヒはSOS団の団員以外には決してみせることのないSOS団専用スマイルで、

「それで、完成したの!？」

自分の興味のあることをすることになった小学生の顔だぞ。完成はしている

「そう。じゃあ今日から撮影ね。キョン、あんたはカメラとか椅子

とか小道具を用意しておきなさい。あたしは写真部からレフ板をも
らってくるわ。前のは壊れちゃったからね」

みくるビームによってな。ていうか、普通壊れてしまった物は弁償
しなくちゃいけないだろ。

「いいの、映画撮影に使ったんだから写真部としては大歓迎よ」

大歓迎も何も、お前がかってにもらっただけだろ。

「綿雨にはお礼をいっておけよ。1人で2時くらいまで書いていた
んだからな」

ハルヒは少し考え込み、

「そうね。副々団長から副団長にして、古泉くんを団長補佐にしよ
うかしら」

俺はそういうことを言っているんじゃない。お礼をしろと言ってい
るのだ。

「これから毎日撮影ね！」

困ったもんだ。来週にはテストが控えてるって言うのに、毎日撮影
だと。

今回こそは谷口を裏切って赤点をまぬがれようと思っていたと言う
のに。

「勉強ならあたしが教えてあげるわよ？」

「遠慮しとく」

お前に教えてもらうと解けない問題を力づくで解かせようとしそう
だからな。映画撮影を続けたいのなら俺が赤点を撮らないことを望
んでくれ。

あとで綿雨、無理だったら仕方なく古泉に教わるとしよう。長門で
もいいのだが、大学で習いそうな定理でも使って解いて俺が混乱し
そうだ。

授業を終えて、部室へ行くともう既に全員が揃っており、ハルヒは
綿雨の書いた原稿をチェックしていて綿雨は寝ていた。丁度俺が開
けたドアの音で目がさめた。

「この脚本、よくできてるじゃない！濡れ場がないのは残念だけどまあこれでいいわ。それじゃああたしは冒頭シーンの撮影場所として適切な場所を探してくるから、みんなはここにいて」

と、一言残してハルヒは出て言った。これで一段落だ。綿雨もどうやらもう寝る気にならないのだろう、ノートと教科書を出してテスト勉強を始めていた。

「なあ、綿雨は数学？は理解できるか？」

「え？あ、ちよつと見せて下さい」

俺は教科書を綿雨に渡してやる。古泉が「勉強なら僕が教えてあげますよ」とうざったいほど爽やかに言ってきやがる。引っ込んでいる。

「……」

綿雨は教科書を見つめて、机においた。

「分かりますけど、教えるのならつとまるかどうか……」

いえ、是非教えて下さい。

綿雨が俺に基本問題の解き方を教わって、古泉が詰め将棋をして、朝比奈さんは映画撮影に今から震えていて、長門がハードカバーの本を黙読していると、ハルヒが戻って来た。

「見つけたわ！全員準備しなさい、それと……みくるちゃんはこのに残ること」

朝比奈さんは涙目になって、「いやいやいやいやです」と連呼している。

ハルヒと朝比奈さんと、長門は部室内に残って、あとの3人が部室外で舞っている。10分後、ウエイトレス姿の朝比奈さんと、魔法使いの服を着て、星形の魔法の杖だかロッドみたいなものを持ってハルヒは『超監督』と書かれた腕章をつけて、『副監督』とかかれた腕章を手に持っていた。その『副監督』とかかれた腕章を綿雨にわたしてつけさせて、そしてハルヒを先頭に出発した。

副監督の提案でスポンサーの宣伝を劇の途中にぶちこむのではなく、

冒頭部分でやった方が映画らしくなると言うことでまずは山道を下ってそして2駅のつて、大森電器店へ向かった。

「今回もスポンサーになってもらった大森電器店は、店長さんかとも……」

そんなこんだで30秒程のコマーシャルを2本とった俺たちはその駅の周辺にはたったの10分もいなかったのにまた2駅のつて、光陽園駅へ戻った。そして、SOS団が最初に向かった場所、そこは朝比奈さんが俺に未来から来たと言った場所、去年の映画撮影にハルヒの願望によって秋なのに『秋桜』ではなく『桜』が咲いた場所である。

「んーと、シーン1はEpisode 00での内容をいれるわ。

これは00から引つ張ってくるからキヨンに任せておくとして、まずはシーン2。平和になったと思っているみくるちゃんが、古泉くんとの関係で悩んでいるシーンから」

アウトとセーフギリギリのラインだな。ハルヒのことも考えて脚本を作ったのだろう。

「みくるちゃんはそのからゆっくりと歩いて、このセリフを言いなさい。キヨンはわざわざキャスター付きのビデオカメラの台を買ってきてあげたんだから活用して、みくるちゃんの真横をとるようにしなさい！」

はいはい。

朝比奈さんはハルヒの指定した位置につき、そしてアクションの合図と同時に歩き出した。

「古泉くん、最近みかけないけど…どうしたんだろう…もしかしてわたしのことを、」

朝比奈さんは割と落ち着いていた。少し慣れたんだろう。去年からいろいろとあったしな。

「みくるちゃん、その調子よ！」

「あつ、あつ、ハルヒさん声入っちゃいますよ」

ハルヒが朝比奈さんの迫真の演技に声をだしてしまう。そういえば

去年の映画はNGなんてカットしていないもんだからハルヒの声が入っていたり登場していたりしていた。

副監督の提案でカットにされ、もう一度取り直しになった。

「古泉くん、最近みかけないけど…どうしたんだろう…もしかしてわたしのことを、き、嫌いになっちゃったのかなあ」

確か前回の映画は古泉が超能力を覚醒して悪い宇宙人の有希を撃退しただけである。嫌いになる理由がどこにあるのかとは思ったが、脚本家は昨年映画を見ていないので、仕方が無いことである。

そこへ、しばらく朝比奈さんの前に姿を表さなかった古泉の登場である。

「朝比奈さん、お久しぶりです」

朝比奈さんは古泉との突然の再会に驚き、そして胸をなでおろす。そうして、古泉と朝比奈さんは1つのベンチに座って話し始めた。カメラ、少しずつズームイン。

俺はカメラマンの才能があるのかもしれない。誰かほめてくれ。

「すごいですね」

綿雨に棒読みで言われた。嬉しくとも何ともないな。もうすこし感情をこめて

「？」

あ、知らないふりをされた。まあ、いい。

そうして順調に撮影を終えた。俺はこんな映画撮影ならば、俺は喜んでやるさ。

でも、そんな日々は続く訳でも無く。

そうして映画撮影を終えた日、ハルヒは言った。別れ際に

「シャミセンを連れてきなさい。喋るように仕込んでおくこと。じゃあ今日はこれで解散！」

そうして次の日である。俺はシャミセンを連れて次の撮影場所へと向かった。

長門のマンションの裏のちよつと広いスペースである。

「わたしは、またこの世界に復活した」

と、いつものように無感情といわんばかりの口調で撮影を続ける。

そして、問題はここからである。

「よし、シャミセン喋りなさい！『わたしもイツキを必要としている』と！」

結果はいわんでもわかるだろうな。ちなみに脚本は完璧無視である。なんてったってまずシャミセンは去年の影響で喋れなくなっているという設定だ。まあ、去年も喋るシーンはとられなかったのだから。

「アクション！」

ハルヒの声と共にシャミセンは言ってしまった。

「わたしもイツキを必要としている」

.....

「組織はもう一度わたしにチャンスをくれた。だから今度の機会は逃す訳に行かない」

何も反応をみせない長門。普通撮影中止だろ！

「カット！まさかミケネコでオスだとは思わなかったわ」

お前はツツコムところは古泉に共通しているな。

「やっとあたしの思い通りになってきたわね！」

ここから、秋までかけてとんでもないことがおきるのはほかでもない。

涼宮ハルヒの想像 エピローグ

さて、これからの出来事は述べていきたいと思うが、これは秋までの長い期間でおきているのだ。もちろん、その間にはまた事件があるわけで。

特にその間の事件がこれに関わってくるわけでもないのだが。できれば語りたく無い程の災難もあったわけで。でも語らなきゃいけないんだ。

……なぜならあの日、ハルヒは事実を知ってしまったからな。

だから、映画の話はここまでで抑えておくとしよう。もちろん余裕があればすぐにでも語ってやるさ。けど、俺はこれよりもそっちの方が重要なのである。

涼宮ハルヒの想像 エピローグ（後書き）

実は、これより先に書こうか迷った物があるんです。

それが、6月の出来事。以降はちよつと変わったような展開もでてくるので、これを書いておこうと思うのですが、想像を先にした理由は、この出来事が、これから書く内容のすぐ後の出来事だからなんです。

ちなみに、次回は高校1年時代（綿雨未登場）の番外編をはさんでからになります。

今更ながらキャラ紹介とお詫び

設定上、執筆ミスがありましたので、一番下の方でお詫びさせていただきます。

キヨン（Kyon、本名不明）

本作の主人公。県立北高校1年5組（原作9巻『分裂』から2年5組）の男子生徒であり、SOS団団員その1。身長170cm。全作品を通しての語り手でありツツコミ役も兼ねる、涼宮ハルヒ絡みの厄介ごとを背負い込む苦勞人。「キヨン」というのはあだ名で、彼の叔母が彼の本名をもじって呼び、それを彼の妹が広めたもの。本名は作中で一度も呼ばれたことがないため不明。なお、本人はあだ名で呼ばれることを快く思っていない。家族構成は、両親と妹。

涼宮ハルヒ（Haruhi Suzumiya）

本作のメインヒロイン。北高1年5組（原作9巻『分裂』より2年5組）の女子生徒であり、SOS団団長。身長158cm。キヨンと同じクラスで、キヨンのすぐ後ろの席に座る（何回席替えをしても、ハルヒの能力のためか位置関係は不変）。入学当初は腰まで伸びるストレートヘアで曜日ごとに髪形を変えていたが、キヨンにそのことを指摘されて以降は肩にかかる程度の長さで揃えている。黄色いリボン付きカチューシャがトレードマークで、小学校時代から愛用している。

実は「どんな非常識なことでも思ったことを実現させる」という、神にもなぞらえられるほどの力を持っており、そのため様々な組織が彼女に関心を抱いている。だが本人はその力に全く気付いておらず、無自覚の内にそれは具現化され、キヨン達は毎度それに翻弄されている。

長門有希（Yuki Nagato）

北高1年6組（原作9巻『分裂』より2年）の女子生徒であり、唯一の文芸部員。身長154cm。ハルヒが文芸部室を乗っ取った際、SOS団団員その2として組み入れられた。ハルヒ曰く「SOS団に不可欠な無口キャラ」。いつも無口で無表情だが、知識欲・食欲は旺盛。谷口曰く「容姿はAランク・（マイナー）」。「読書を好み、いつも何かしらの本を読んでいる。感情表現に乏しく、表情の変化はほとんどない上、口を開いても淡々と短い言葉でしか話さない。自宅室内を含むほとんどの場面で北高の制服を着ており、冬場はその上にダッフルコートを着る。小柄かつ起伏の小さい体型で、キヨン曰く体重も軽い。

その正体は、情報統合思念体によって造られた対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェイスであり、簡単に言えば宇宙人。

朝比奈みくる（Mikuru Asahina）

北高2年2組（原作9巻『分裂』より3年）の女子生徒であり、SOS団副々団長兼書記。身長152cm。ハルヒが「ロリで巨乳な萌えマスコットのキャラ」として拉致してきた。キヨンに「朝比奈さんより可愛い生物はいない」、谷口に「朝比奈さんを泣かせることは学校の半分（男子全員）を敵にする」と言われるほどの超美少女であり、北高のアイドル。髪は栗色のロングヘア。左胸の上に星形のほくろがある。運動神経は良くない。元々は書道部に在籍していたがハルヒによって退部させられ、SOS団専属のメイド兼マスコットとなる。第7巻『陰謀』で、バレンタインデーの翌日に実施したイベントで巫女に扮し、団の活動費を調達した功績により、ハルヒから副々団長に任命された。

その正体は、はるか未来から来た未来人でハルヒの監視係である。

古泉一樹（Itsuki Koizumi）

北高1年9組(第9巻『分裂』より2年9組)の男子生徒であり、SOS団副団長(『想像』より団長補佐)。身長178cm。5月という半端な時期に転入してきたことから、ハルヒに「謎の転校生」としてSOS団に勧誘された。いつも微笑を浮かべ穏和な物腰をしており、同級生に対しても常に敬語を使う。在籍している1年9組は、理数系の特別進学クラス。頭も運動神経もよく美形でもあり、女子生徒からの人気は高い様子。第3巻『退屈』収録「孤島症候群」でのゴージャスな夏休み合宿の企画立案の功績により、ハルヒから副団長に任命される。

その正体は超能力者であり、その集団である組織・「機関」に所属している。ハルヒの精神状態の不安定が原因で発生する「閉鎖空間」への侵入と、その中で破壊活動を行なう「神人」を倒す能力をもつ。

綿雨麻理 (Mari Wataame / Asari Wataame)

『活動』より北高1年の女子生徒。SOS団副々団長(『想像』より副団長)。身長156cm。SOS団とは、キョン達が1年のときの秋に出会っており、自分からSOS団に入団してきたSOS団団員その3。名前の読みは「あさり」と「まり」があり、どちらが本当かは現在不明。キョン曰く美少女。長門とは昔にあったことがあるらしい。入団試験の結果で副々団長に任命、映画の脚本書き上げの功績で副団長に任命されている。

その正体は普通の人間でありながら空間移動能力と、触れた相手の疲れをとる能力(ただしそれは自分に蓄積する)があり、人間1人分のストレスがあれば睡眠無しで1時間(活動状況によって時間変動、睡眠ありで30分)でとることができる。また、このような能力をもつ人間は、どの組織にもある程度中立的立場にいる。

時雨秦 (Shin Tokisame)

『孤独』のゲストキャラクター。SOS団とは、キョンが1年のと

きの秋に出会っている。綿雨とは仲間である。所持能力は相手の行動を予知することができる行動予知能力である。

お詫び

『活動』第1章にて、時雨がSOS団に入団するような文章がありました。それは設定のミスになります。

本来は、『孤独』編で登場する予定になっております。ここに慎んでお詫び申し上げます。

なお、現在は修正済みです。

レニー シーズン デイ

梅雨の時期になった。最近の天気は雲行きがあやしく、そらはいつも灰色に包まれている。太陽の光がさしこまない時は、いつぞやの閉鎖空間を思い出して気がならない。いや、本当は思い出したくも無いことなんだから。

野球大会を無事に終了し、ハルヒが持つて来たサッカーとラグビーだが、どうも大会の日はほぼ全員が都合が悪く、朝比奈さんと古泉と長門は無理とのこと。ちなみに俺は当然予定は入っていなかった。もちろんハルヒも暇だろう。

結局その話は無かったことになった、その直後である。

SOS団結成からもう1ヶ月。もうすぐで2ヶ月だ。

俺はもう部室へいくのが日課になってしまっているらしく、気付いてみれば俺は既に部室の前へ来ていた。

朝比奈さんの着替えているところを見たいのは山々ではあるが、毎日そうだと俺としても心がいたむ気がするので俺のドアをノックしておく。

「はあい、どうぞ」

朝比奈さんのふわふわした声が聞こえてくる。どうやら大丈夫らしい。ドアを開けた。

いなかったのは俺とハルヒだけだったらしい。あいつのことだ、また何かくだらないことでもしているんだろうさ。

外は地球に水という恵みを与えようと考えている雲が大量のタライに水をいれていっぺんにひっくり返したといわんばかりのどしゃぶりである。

結成1ヶ月しかたっていない俺たちは特別することは無く、ハルヒ

の思いつきに従ったり、ハルヒがいけないときは静かにすごしているだけであり、ハルヒがいけないと活気がなくなるのだ。あいつが部屋の空気を100%左右させるといっても過言では無い。

俺も長門も古泉も朝比奈さんも、全員平団員なのに、俺は奴隷、朝比奈さんはマスコットというよりただのいじられ役である。古泉と長門はどうして何か物事をさせられないんだ。たまにでいいから誰かかわってくれよ。

「どうかしましたか？ 難しい顔して」

難しい顔をする必要があるのはお前にもあるんだがな。

「涼宮さんでしたら、そのうち来ると思われますよ」

俺はその心配をしているんじゃない。一度殴らせろ。

「冗談です。でもあなたは先月、涼宮さんに・・・」

よし、殴る。俺は今そう心に誓った。そう。意志をかえるつもりは無い。

「冗談です。あなたは冗談が通じないのですか？」

通じるさ。でも最近は冗談が通じないことの方が多いのさ。それもやっぱあいつのせいだ。

「どうぞお茶です」

朝比奈さんは俺の前にお茶ののった御盆を差し出す。俺は「ありがとうございます」とだけ言って、そして一口だけ飲んだ。

真横で緊張していた朝比奈さんに「美味しいですよ」というと、安堵した表情になって「よかった...」とつぶやくと朝比奈さんは古泉のところへとお茶を持っていった。

いつも通りの運動部の声の代わりに聞こえてくるのは水が地に叩き付けられる音だけである。俺もすることがなかったのしぶしぶ立ち上がり、本棚で適当に俺も興味がありそうな本を抜き出し、長門に「借りるぞ」といって承諾を得て、そして本の世界へと入った。

聞こえてくるのは古泉が本を片手にやっている囲碁のパチンという音と、静かな部屋にいとやけに騒がしい時計の秒針の音、そして俺と長門が本をめくる音だけしか聞こえてこなかった。朝比奈さんは退屈そうである。

俺はこんな日も悪くない…いや、こんな日がずっと続けばいいと思っていた。ハルヒがいなければこうやって本を読んでいたたり、古泉とゲームをしてやったりするだけでいい。それにサボろうと思えばいつだってサボれる。

朝比奈さんだって同じだろう。いつもいつも着たくない服を着せられ、やりたくないことをさせられ。ストレスは溜まる一方だ。

そんなわけで、結局ハルヒは1日中部室に姿を現さなかったのだ。俺達は部活終了時刻の合図で部室を出て、俺が鍵を閉め、職員室へ鍵を返すと4人ででていった。

今思えば、それはなんとなく虚しかったんじゃないかという気がするが。

んで、そんなこんなで俺達が2年に進級した6月の話になる。

ちょうどそんな出来事があった日と同じ日付の日のことだ。

俺がきたときは部室にハルヒの姿は無かった。去年と同じ考えを抱きながら、俺は所定の席に座って朝比奈さんのお茶を受け取ってすっっていた。今日も雨だ。

今回もハルヒは部室に姿を現さないのか？と思っていたと、その思いを読み取ってきたのだろう。ハルヒが部室のドアを勢いよく開きやがったのだ。

「みんな！今年こそ、サッカーの大会にでるわよ！」

朝比奈さんはドアの音でビクリと反応する。俺はぼかんと口をあけ、

長門と古泉と綿雨はハルヒの方をずっと見ていた。いや、長門はすぐに本へと視線を戻したのだが。

「・・・は？」

俺が聞き直す。まさか去年出れなかったサッカーの大会に出るとかいうんじゃないだろうな。

「言うつもりよ。去年は残念ながら出場できなかったし」

残念も何も、一応文化の部類に入る同好会がスポーツの大会に出場する意味がどこにあるというのだ。

「サッカーは11人制らしいわ。ここの6人と・・・あと5人はどうしようかしら」

いつもそうやってお前は話を進めるんだな。独裁政治でもやりたいのだろうか、こいつは。

「じゃあいつも通り谷口と国木田を呼んでおく」

「じゃあそれでいいわ」

いつもこういうとき、あいつは人選が適当である。とりあえず出場できればいいらしい。

「じゃあわたしは鶴屋さんを・・・」

「おっけー」

あと2人だ。流石にサッカーに俺の妹はどうかと思うんだが、他にあてがいただろうか。

「・・・ない。もういいや、妹で。」

「俺の妹でもいいのか？」

「いいわよ。去年も活躍してたし」

長門の呪文でな。あと1人はどうするんだ？

「もう10人でいいわ。参加資格9名以上だって」

本気かよ。もうどうにでもなれ。

いつの間にか雨は降り止んでいた。

梅雨というものは基本的に雨の降る日が多くなるという捉え方だが、なんと本日、サッカー大会本番は晴天。雲1つすらなかった。

「よし、ポジションを決めましょう！」

ハルヒはアミダを取り出す。あのなあ、サッカーも野球も得意不得意というものがあるんだぞ。

「こうで、こうつと……」

お知らせしよう。ポジションが決まった。

フォーメーションは人のため、4 - 3 - 2となった。そして、位置は
オフェンス……俺、ハルヒ

ミットフィールダー……谷口、国木田、古泉

ディフェンス……朝比奈さん、長門、鶴屋さん、俺の妹

キーパー……綿雨

と、結局心配な奴らがDFになってしまっている。これじゃあカウ
ンターを受けたら一発だろう。

試合は5点差がついた時点で終了。早く帰りたいがそういうわけに
もいかないはずだ。

「なあ、古泉。聞く必要がないが聞いておこう。この試合負けたら
どうなる？」

「聞くまでもないでしょう」

だから前置きしたろ。それと顔が近い。近寄るな。

「当然、閉鎖空間が出るでしょうね」

「たたく。あいつは子供か。」

「とりあえず1回戦目は勝つ必要がありますね」

「宜しく願います」

相手はやっぱり優勝候補ときた。これもまさかとは思うがハルヒの
仕業なのか？

主審のホイッスルが鳴り響く。キックオフはこっちだ。ハルヒにボ
ールを蹴ってやると、ハルヒはなんと優勝候補の選手をいきなり抜
き出した。

1人でなんと10人も突破したハルヒはシュートを放った。しかし
これはキーパーによって阻まれた。流石だ、このチームの守護神だ

からそう簡単にゴールは決められないだろう。

相手はボールを遠くへ蹴りだす。MFの選手がボールを受け取ると、すぐに突破にはかる。

谷口はあっさり抜かれ、朝比奈さんは勢いによけてしまい、長門は動かず、妹はその辺で遊んでいる。もうキーパーと1対1だ。負けだなこりゃ。

相手の勢いに乗ったシュートはちょうど綿雨の正面で、ハルヒ同様、文武とも優秀なためにこれを簡単にとる。

それを鶴屋さんに転がして渡す。鶴屋さんも運動神経はいい。見事にハルヒの前までパスをだしてきた。

ハルヒはやはり選手をござう抜き、シュートを打つかと思っていたが俺にパスをだす。サッカーなら遊びとしてならやったことがあるからな。俺はその要領でシュートを打つ。

俺のキックとは思えないほど美しい放物線を描いたそれは、見事ポストの右側。大はずれだ

「もう！なにやってんのよ！」

ハルヒがこちらに叫んでくる。じゃあお前が全部やってくれよ。

結局守備陣でしつかりと役目を果たしたのは鶴屋さんと綿雨で、鶴屋さんは相手のボールをしっかりとカットして、綿雨は1対1でも見事シュートをはじく。他の6人は何もしていなかった。

前半終了して結果は1 - 0で1点差で負けている。

「後半で逆転を狙うわよ」

後半はポジション変更。GKはファインプレーも見せてくれた綿雨のまま、DFは鶴屋さん、谷口、古泉、朝比奈さんで、MFを長門と国木田と妹。OFはそのままだ。

後半、相手の先攻。ハルヒがボールを奪い、走っていく。俺からめずらしく「パス！」と叫んでやるとハルヒもこちらへパスを出してきた。俺はシュートを放つ・・・ふりをしてハルヒにパスを出す。不意をつかれたキーパーは反応が遅れ、女子とは思えない弾丸シュ

ートでゴールネットを揺らした。同点だ。

「よし、これで同点に追いついたわ！」

1-1である。今回はずるをしていない。珍しくまともである。

今更だが試合は20分ハーフである。後半15分、鶴屋さんを抜いた相手チームは綿雨と1対1の勝負。

綿雨は少し前にでて、ドリブルを続ける相手チームのボールを取ろうとする。そこで何と綿雨の顔面目掛けてシュートを放ちやがった。
「あぶ！」

見事HITしたために顔を抑える綿雨。相手はさらにシュートを放つ。古泉、悪いが閉鎖空間の対処、せいぜい頑張ってくれ。

・・・と思った瞬間、ゴールネットはゆれなかった。何故ならば。

綿雨がテレポートを使っていた。相手は驚いている。どうやら移動間は近いようで、テレポートとはバレなかったらしい。

ハルヒは「ファインプレーよ！」と喜んでいるし、谷口やら国木田、鶴屋さんも気付いていなかった。

俺はとりあえず綿雨のところへと向かう。

「大丈夫ですか？」

とりあえず顔の心配をする。

「ひえいきひえいき、なへてるはら」

へいきへいき、慣れてるからといたいらしい。慣れている？いつも何をしているのだろうか。

「ごみえん、テヘポーホつかっしやつしや」

ごめん、テレポート使っちゃった、だそうだ。まあ、今回は仕方ないだろう。どうせ相手チームには権利を譲るのだからな。

後半19分、ポジション交替。キーパーを鶴屋さんに変更。綿雨は前へでてもらって、MFにつく。攻めの隊形だ。

ボールを受け取った国木田が綿雨へパスを繰り出すと、1人だけ抜いてハルヒにパスをまわす。ハルヒがまたごぼう抜きをすると、俺にパスを繰り出す。

しかし俺はうまく受け取れず、体制をくずす。しかし、運が良かった

たのだろう。足にあたったそれは、うまく弧を描いて、前にでていたキーパーの頭上を通り越し、そしてゴールラインを割ったのだ。結果、2 - 1。俺達の勝利である。

結局、泣き崩れる優勝候補のチームに権利を譲り、俺達はファミレスへといった。昨年と全く変わらない。

綿雨は、反則したお詫びにと俺のおごりだったはずの代金の半分を払ってくれた。俺は別に気にしていないのだが。

ハルヒはどうやらこれで満足のようだ。次の日は何も言わずただただネットサーフィンをしているだけだったからどうやらそうらしい。これで平和が戻ってくる。多分な。

そして、その多分くる平和が来ないと感じたのはそのすぐ数日後だった。

レニー シーズン デイ（後書き）

あけましておめでとうございます。（今更ながら
遅い更新となりました。今回は野球ではなくサッカーですね。
”レニーシーズンデイ”意味はただ梅雨の時期であるだけでした；

涼宮ハルヒの孤独 プロローグ

我々SOS団は、季節外れの百人一首大会を開いていた。

もちろん言い出したのはハルヒである。映画の撮影を一旦休止する
と言い出したのはどうやらこれが原因ではないようだが。

映画を撮影しはじめてたったの3日。それだけでハルヒは映画製作
を投げ捨てやがった。

「なんかめんどろになちゃってね。夏休みからやりましょう」
ハルヒの一存でだ。

その後、2日間暇だと叫び回っていて結局辿り着いたのがこれら
しい。どうせどつかで目に入ったのだらう。それ以外にやりだそうと
いいそんな理由も無い。

読み手は古泉だった。

「これやこの」

「あつたあ！」

結果をおしらせしようではないか。現在始めて5分しかたっていないが、もう優勝候補は2人決まってしまうている。ハルヒと綿雨だ。必ず上の句で2人のどちらかがとってしまうため話にならない。俺は1枚。唯一知っていた、「春過ぎて 夏来にけらし 白妙の衣 ほとすてふ 天のかぐ山」をとった。

それもとったのはハルヒと同時に、譲ってあげるわということでも
らったわけなのだが。

長門もしているはずだ。しかし長門は動こうともしていない。朝
比奈さんと言えば、上の句だけではわからないのだらう、とれない
ために何か難しい顔をしている。

「春の夜の」

「ありましたあ」

「ほととぎす」

「あつたわ！」

「わたの原」

「これは俺も知ってるぜ、これだ！」

「あんた1回休み。わたの原は1枚じゃ無いのよ、覚えておきなさい！」

そんな百人一首大会は無事終了。

ハルヒ50枚、綿雨48枚、俺2枚。

こいつら、本当に人間なのだろうか。

さて、また俺にとっていやな出来事がおころうとしている前日である。

そんな中俺はのんきに百人一首なんてことをやっていたわけだ。

部活終了時刻、長門が出ていく間際の「気をつけて」が不吉な予感を感じさせた。

頼むぜ長門。何に気をつけたらいいのか説明してもらわないと心の準備ができないのだからな。

もう一度言おう。その出来事は翌日に起こったと。

第1章（前書き）

今まで涼宮ハルヒの活動を読んでくださった皆様、大変申し訳ございません。

家庭の事情、勉強等に追われ、かなりの間更新ができていませんでした。

これまで感想を何度も送ってくださった方、本当にすいません。

これからも時間があるときに少しずつ更新していきますが、やはりペースは遅いと思いますがご了承ください。

第1章

次の日、いつも通りの朝を迎えていた俺は、目覚ましの騒音を止めると布団へ潜って睡眠に戻った。それもつかの間、妹が現れては俺の寝ている上でピョンピョン跳ねているので寝てもいられない。・

・いや違う。今日はそんな騒がしい妹は部屋にいなかった。

いつもと違うことを不思議に思い俺は目を覚ます。布団をどけ、顔を横に向ける。

視線の先には、ある人物がちょこんと正座をして座っていた。

「・・・」

長門だ。それとともに俺はおかしな点に気付いた。

時計はとくに朝の7時。日が昇って明るくなってくる頃だ。しかし外はまだ夜であるかのように暗かった。

長門は制服を着て、座っていた。

俺は長門が何故ここにいるかを気にする前に、まず気になることがあった。

「聞きたくは無いが、ここは閉鎖空間なのか？」

俺が一番嫌いな場所だ。奇妙でまた人がいないことが恐ろしい。

「閉鎖空間とは別物。でもそれに等しいもの。」

どういうことだ。閉鎖空間に近いもの？それは一体どういうことだ。

「閉鎖空間に入れるのは、『機関』とそれに関係する者のみ。しかし今回は特別、涼宮ハルヒに何らかの関係がある者がこの空間に強制的に存在する」

理解できるようでないような。朝から頭をフル回転させようとするのは御免だ。

それに、俺は2年前、閉鎖空間に入ることが出来たぞ。

「あれは小泉一樹がその場にいただけ」

そういえばそんなことがあった。でもハルヒとともに入ったことがあったぞ。

「涼宮ハルヒ本人の願望と仮定すれば、閉鎖空間を生み出す彼女が閉鎖空間に入るとは可能となる」

で、今回は何が違うというのか？

「今回の空間生成の直接の原因が涼宮ハルヒではないということ。」
「……………もう一度言ってくれ。」

「今回の空間生成の直接の原因は涼宮ハルヒではない。」

「待て、じゃあこれを作ったのは誰だ？」

「『機関』」

機関だと。何故だ。なぜ今になってこのような空間を作る必要がある。

「ここに長居するのはまずい」

「この空間にいるのは、『機関』、古泉一樹、私、綿雨麻理、朝比奈みくる、涼宮ハルヒ、そしてあなただけ」

つまり、SOS団は残されたということか。

「ただし涼宮ハルヒは、普段の涼宮ハルヒではない」
何だと？それは一体どういうことだ。

「SOS団での記憶をすべて失った状態」

俺は喉の奥に言葉がつまり、何もいえなかった。

「……………」

「……………」

少しの間だけ無言の時間が続く。時間でならたった一瞬でも俺の感覚だととても長く感じられた。

「とりあえず、こっち」

長門が先導をとる。俺は後に続いて走る。

最初に向かった先は、綿雨の家の前である。玄関の前には、綿雨がいた。第一声は、

「長門さんも、私も詳しい原因と目的は分からない」

一言、それだけだった。

「長門もなのか？」

俺はしばらく長門を見つめる。長門は重い口を開き、小さな声で寂

しそつに言った。

「情報統合思念体との通信が遮断されている。今の私には詳しいことは分からない」

・・・こんな長門を見たことがある。

そうだ。雪山に遭難したときの長門の表情に似ている。

本当は答えたいのだろう。けど長門本人だけではどうしようもない。たった1人の人造人間に、宇宙の膨大な量の情報を記憶させるなんてことは情報統合思念体でも無理な話だ。

「私が知っているのはこの空間をつくりあげたのは『機関』ということ。それだけ。」

「それはさっき聞いた。最後に1つ聞いてもいいか？」
「なに」

「朝比奈さんと古泉とハルヒはどこにいる」

「朝比奈みくるは待機させている。古泉一樹がどこにいるかは不明」
俺たちはまた歩き出した。

やはりここも長門が先導をとる。しかし長門のもとと小さい体が普段よりももっと小さく見えた。
重い空気が漂っている。

「私と長門さんと朝比奈さんはあなたと涼宮さんを守らなければいけない状況にある。古泉くんは、『機関』の人間だけあって消息は不明。」

だろうな。分かっているさ。古泉が『機関』の一員？それがどうしたっていうんだ。

覚えてるよな、古泉。

お前があの時、言っていたこと。

いま使つべきときなんだろう？

第1章（後書き）

2010/03/23 10:31

古泉が変換ミスでところどころ小泉になっていたところを修正しました。

お詫び。

いきなり本題に入ります。

家のPCの前に座るのが、およそ2ヶ月ぶりです。

何が言いたいのかといいますが、単に私の多忙です。

詳しい事情は申しあげかねますが、そのために更新はもちろん、お知らせすらできなかったことをお詫び申し上げます。

今後ですが、残念ながら私による小説の更新は停止となります。

「涼宮ハルヒの孤独」、執筆途中での更新停止になりましたことをお詫び申し上げます。

みなさん、今までご愛読の方、有難うございました。

なお、現在私の知人の方が「涼宮ハルヒの架空」を主題で執筆にとりかかろうとしておりますので、

よろしければそちらの方を読んで下さると幸いです。

(<http://ncode.syosetu.com/n28280/>)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9537i/>

涼宮ハルヒの活動

2010年11月16日09時45分発行